

物質化した霊たち

ガンビア・ボルトン

【作品情報】

Gambier Bolton 著

『Ghosts in Solid Form』(1919)

【著作権について】

本作品の原文は、著作権保護期間が満了している
(パブリックドメイン)と判断される資料に基づいて
います。

【翻訳について】

本日本語訳は、公開者本人による独自翻訳です。
既存の翻訳や他者の著作物は一切使用していま
せん。

【注意事項】

万が一、著作権等に問題がある場合は、速やか
に対応(修正・削除)いたしますのでご連絡くだ
さい。

【翻訳者】

SEIJI

【免責事項】

本翻訳は個人による学術・研究・情報提供を目的としたものです。内容の正確性・完全性について保証するものではありません。

本翻訳の著作権は翻訳者に帰属します。無断転載はご遠慮ください。

2026/7/29

序文

今日、世界各地の科学者たちが生命の起源と、その（可能性としての）継続性という問題に真剣な関心に向けつつある中で、私は今こそ、研究者たちの間で「物質化現象 (Materialisations)」として知られている現象に関する教科書を一般の人々に提供すべき時が来たと感じている。

それは、科学者であれ一般の人であれ、この極めて重要な問題を解明しようと努力している探究者たちの助けとなるためである。というのも、私の考えでは、物質化現象の中にこそ、最終的には「人はどこから来たのか？」という、あらゆるゆりかごが問いかける問いと、「人はどこへ行くのか？」という、あらゆる棺が問いかける問いを解決するための手がかりが見いだされる可能性は、決して低くないからである。

この教科書には、七年間にわたって行われた一連の実験の成果が、平易で分かりやすい言葉で収められている。

そのうちのいくつかは、ロンドンの王立協会会長であった偉大な科学者、William Crookes によって行われたものであり、第 III 章で言及されている（そして私の実験は、その続編という性格のものであった）が、それらを除けば、すべての実験は私の立ち会いのもとで実施されたものである。

また、これらの実験に関する報告は、ロンドンにあった私の三つの研究協会が保管していた公式記録から編集・整理されたものである。

目次

第 I 章 条件(CONDITIONS)—— 1

第 II 章 不正行為に対する予防措置
(PRECAUTIONS AGAINST FRAUD)——
15

第 III 章 検証試験(TESTS)—— 35

第 IV 章 問いへの回答(QUESTIONS
ANSWERED)—— 69

付録(APPENDIX)—— 115

訳者注) 文言にセンシティブという言葉が出てきますが、これは、靈感の鋭い人、感受性の高い人という意味です。霊媒という言葉に置き換えられなくもないのですが、ヒーラーもセンシティブでもあるので、解釈が狭くならないようにセンシティブという言葉のままにします。

第Ⅰ章

条件

「確固たる事実の一粒は、理論十トンに値する。」

「このことについて考えれば考えるほど、私はますます次の結論を強く感じるようになる。人間の魂がこの世界で成し遂げる最大のことは、何かを“見る”ことであり、そして見たことをありのままに語ることである。考えることのできる一人に対して語ることのできる人は何百人もいる。しかし、本当に見ることのできる一人に対して、考えることのできる人は何千人もいる。明晰に“見る”ことは、詩であり、予言であり、宗教であり、そのすべてを兼ね備えたものである。」——ジョン・ラスキン

作業仮説

温度、光その他の既知かつ合理的な条件のもとで、私たちの世界の外側に存在するある領域の存在者たちは、現在のところ未発見の供給源から物質化された一時的な身体を用いて、繰り返し地上に姿を現すことが実証されている。そして、感応力を持つ者(センシティブ)と呼ばれる男女の特定の人々を媒介として、そのような現象は起こる。また、その実証に必要なことが証明されている条件を整えるならば、誰に対しても同様に実証することができる。

私は、自分の人生の七年間を、この主張について慎重かつ批判的な調査に捧げた時期を振り返る。

その主張とは、西洋および東洋の神秘家たちだけでなく、サー・ウィリアム・クルックスや Alfred

Russel Wallace 教授をはじめとする著名な科学者たちによっても唱えられていたものである。

すなわち、明確に定められた特定の条件のもとでは、一見すると無から生じたかのように、完全な形を備えた身体を出現させることが可能であり、その身体には別の領域から来た(おそらく)人間的存在が宿っている、という主張である。

その驚異は、今なお私を魅了してやまない。

現在私たちが知っている自然法則が、これほどまでに大きく覆されるなど一見不可能と思われることであつたにもかかわらず、それが明らかに可能であると証明されたのである。

そしてその事實は、多くの出来事に満ちた私の人生の終わりまで、「驚異中の驚異」として残り続けるだろう。

というのも、これと比べれば、自然界最大の神秘である人間の誕生——正常な受精による場合であれ、人工的な受精による場合であれ——卵子が受精し、胎児として数か月にわたり子宮内で成長と発達を続け、その後、無力で弱々しい状態でこの世に生まれ出るという過程は、生理学を学ぶ者すべてにとって驚異的なものであるとはいえ、比較すればその重要性は小さく見えてしまうのである。

なぜなら、これらの物質化現象においては、完全に発達した人間の身体がほとんど瞬時に作り出されるからである。

その身体にはあらゆる器官が備わり、それぞれが正常に機能している。

さらに、その身体には一時的に、思考し、推論する存在が宿っている。

その存在は見ることができ、聞くことができ、味わうことができ、匂いを感じることができ、触れることができる。

そしてその身体は、実際に手で触れることができ、重量を量ることができ、寸法を測ることができ、さらには写真に撮ることもできるのである。

これらの主張が最初に私の耳に入ったとき、私は直ちに、自分が極めて綿密な調査を必要とする問題に直面していることを悟った。

そして私はその場で、あらゆる仕事を中断し、必要であれば何年でもこの主張を批判的に検証することに専念する決意をした。

私はこの問題を冷静かつ偏見なく調査しようとした。

そして、サー・ジョン・ハーシェルの忘れがたい言葉を借りれば、

「まず第一に事実へ直接訴え、その後にそこから厳密な論理的推論を行い、その結果によって立つか倒れるかを決める」

という態度を取ったのである。

そして、すでに述べたように、その結果として、一見不可能と思われたことが実際には可能であることが証明された。

私はこの事実を全面的に受け入れている。

そして、私たちの作業仮説は、もはやいかなる疑いの余地もないほど完全に証明されたと認めている。

すなわち、これらの物質化した存在たちは、今日でも、その実証に必要な条件を整える人であれば誰の前にも姿を現すことができるのである。

彼らが誰であるのか、何者であるのか、どこから来るのか、そしてどこへ去って行くのか——それは、それぞれの研究者が自ら判断すべき問題である。

しかし、彼らが私たちの世界のすぐ外側に存在するある領域に実在しているということについては、もはや疑う余地はまったくない。

私は多忙な人間であり、理論にはほとんど、あるいはまったく魅力を感じない。

この種の研究において、私が求めるもの、そして他の多忙な男女が求めるものは、事実をつかむ合理的な可能性である。

しかも、それは確かな事実、堅固な事実でなければならず、偏見のない探究者であれば誰にでも事実として実証できるものでなければならない。

そうでなければ、このような調査を始めること自体が無意味である。

そして私たちは今や、そのような事実を手に行っている。

しかも、それを純粹に科学的な方法によって証明することができるのである。

少なくとも本研究に関する限り、「物質化 (Materialisation)」という言葉の意味を私は次のように理解している。

すなわち、私たちの世界の外側にある領域から来る存在——それが男性であれ、女性であれ、子供であれ(あるいは動物や鳥でさえあれ)——が、一時的な身体を身にまとうことである。

その身体は、部分的には地上の人々から取り出された物質によって構成される。

そして、その物質はセンシティブと呼ばれる男女の特定の人々を媒介として凝集され、その存在自身によって、かつて地上で生きていたと主張する時の身体に似せて形作られるのである。

言い換えれば、物質化とは、ある存在が身体を伴った触れることのできる形態で出現することである。

すなわち、私たちが実際に触れることのできる形で現れるということである。

この点で、それはアストラル化(astralisation)、エーテル化(etherrealisation)、あるいは幽現(apparition)とは異なる。

後者は、正常な視力しか持たない人にもはっきり見えることはあっても、当然ながら触れることはできないからである。

それでは私は、自分の能力の及ぶ限り、できるだけ平易な言葉で、これらの物質化現象がどのように生み出されると私が考えているか、そして最良の結果を得るために必要であることを私自身が確認した条件について説明してみよう。

まず私は「条件」という問題から取り上げたい。

なぜなら、何らかの条件がなければ物質化現象は生じないからである。

それはちょうど、特定の結果を得るためにさまざまな化学薬品を混合するような科学実験が、実験者

によって適切な条件が整えられなければ成功しないのと同じである。

では、「条件」という言葉によって私たちは何を意味しているのでしょうか。

身近な例を挙げてみよう。

パン職人は、小麦粉、塩、イースト菌を正確な割合で水と混ぜ合わせる。

そして出来上がった生地を、ちょうど適切な温度に加熱されたオーブンへ入れる。

その結果、一斤のパンができ上がる。

なぜだろうか。

それは条件が良かったからである。

もし彼が小麦粉やイースト菌や水のいずれかを省いたなら、あるいはオーブンの温度が高すぎたり低すぎたりしたならば、食べられるパンを作ることはできなかっただろう。

なぜなら、その条件ではそれが不可能だからである。

これが「良い条件(Good conditions)」、「悪い条件(Bad conditions)」、「条件を壊すこと(Breaking conditions)」という言葉の意味である。

さて、私が何百人もの探究者たちに対して、物質化した存在が地上に堅固で触れることのできる形で

出現することが可能であると証明してきた条件は、次のようなものである。

第一に、適切な波長の光、すなわち適切な色の光である。

そしてここで私は、この点についてきっぱりと述べておきたい。

私自身は、常に明るい場所で着座するよう訓練されたセンシティブを用いて実験する限り、光が存在することに何の問題もないということを完全に確認している。

私は二度、昼光の中で物質化現象を目撃したことがある。

また、William Crookes のセンシティブであった D・D・ホームも、フローリー・クック(後のコーナー夫人)も、いずれも暗闇では決して着座しなかった。

後者について言えば、私は彼女と長期間にわたる一連の実験を行ったが、彼女は常に、実験の全時間を通じて十分な明るさを確保することを条件としていた。

というのも、彼女は暗闇というものを考えるだけで恐怖を感じるほどであったからである。

私は、太陽光、電灯、ガス灯、菜種油(コルザ油)による灯火、そしてパラフィン灯の光は、カナリアイエロー、オレンジ色、あるいは赤色の布や紙を通して

濾過しない限り、現象の発生を妨げる傾向がある
ことを見出している。

それは写真撮影のために光を濾過する場合と同じ
である。

なぜなら、それらの光には作用光線(actinic
rays)、すなわち青色光線が含まれているからで
ある。

これはスペクトルの紫側に位置する光線であり、毎
秒約六千億回の振動を行うとされている。

しかし、私が説明した方法で光を濾過すると、現象
の発生は直ちに始まる。

なぜなら、妨害となる光線の振動数が減少し、毎秒約四千億回、あるいはそれ以下になると言われているからである。

物質化現象を扱う際、私たちはしばしば、現在研究している力やエネルギーの形態が、たとえば電気よりもはるかに繊細なものであるという事実を見落としがちである。

熱、電気、そして光は、サー・ウィリアム・クルックスが述べているように、いずれも密接に関連している。

私たちは熱や電気の恐るべき力についてはよく知っている。

しかし、特に自分たちの都合に合う場合にはなおさらであるが、光もまた巨大な動的能力を持っているという事実を忘れがちである。

その振動は、毎分一千二百万マイルという信じ難い速度で空間を進むと言われているのである¹。

したがって、こうした振動の力が、私たちが現在研究しているような、より微妙な力に深刻な干渉を与える可能性があると考えるのは、きわめて合理的である。

¹毎秒 186,900 マイル(J・ウォレス・スチュワート 理学士)。

第二に、私たちは適切な熱の振動を必要とする。

そして私は、華氏六十三度(約 17.2℃)に暖められた、あるいは冷やされた部屋から発せられる熱振動が最も理想的であることを見出している。

これより大幅に高い温度、あるいは特に大幅に低い温度では、結果が弱まり、現象が妨げられる傾向がある。

第三に、私たちは適切な音楽的振動を必要とする。

私はあらゆる種類の楽器を用いて長期間の実験を行った結果、リード・オルガン——「ハーモニウム」または「アメリカン・オルガン」と呼ばれるもの——やコンサーティーナから発せられる振動が最も適していることを見出した。

これらの楽器のリードから生じる独特の振動の性質が、現象発生中に用いる振動として最も適していることが判明したのである。

もっとも、一、二度ほどは、いかなる音楽的振動もなしに良好な結果を得たこともあった。

しかし、そのような例はまれである。

第四に、私たちは特別な体質を持った男性または女性の存在を必要とする。

そのような人はセンシティブと呼ばれている。

そして、その存在が一時的な身体を構築する際に用いる物質の一部は、このセンシティブから取り出されると主張されている。

しかも、それは健康をほとんど損なうことなく行われるという。

私たちは、この点が極めて重要であると教えられている。

なぜなら、ある実験では、自動記録式の体重計の上にセンシティブを座らせ、その座席の下に秘密裏に設置された電気装置によってしっかり固定したからである。

もし実験中にセンシティブが席を立とうとすれば、隣室にあるベルが直ちに鳴る仕組みになっていた。

その結果、完全に物質化した存在が私たちの中に立っている間、センシティブの実際の体重減少は実に六十五ポンド(約 29.5 キログラム)にも達していたことが証明されたのである。

したがって、このような繊細な、いや危険とさえ言うべき実験にセンシティブとして誰かを参加させる前には、その人は医学的な検査を受けるべきである。

それは研究者自身の利益のためだけではなく、センシティブ本人の利益のためでもある。

そして、もし健康状態が何らかの点で標準以下であることが判明した場合には、その健康が完全に回復するまでは、実験への参加を認めるべきではないのである。

私は、完全に形成された一時的な身体をまとった存在が実験参加者たちの間を歩き回っているまさにその瞬間に、センシティブを検査することを許されたことがある。

そして、その時のセンシティブの変形した顔貌、しぼんだように痩せ細った手足、そしてねじれた胴体は、この特殊な種類の現象を生み出すことに伴う危険性を、私のどのような言葉よりも雄弁に物語っていた。

言うまでもなく、物質化現象のためのセンシティブは極めてまれである。

今日、イギリス諸島に住む膨大な人口の中でさえ、そのような人は二人か三人しか見つからない。

もっとも、ヨーロッパ大陸には少数存在し、北アメリカには数人いるとされている。

北アメリカでは気候条件が、そのような人々の能力の発達により適していると言われているのである。

さて、センシティブとは何であり、なぜ彼らが必要なのだろうか。

物理現象(物質化現象を含む)を生み出すことのできるセンシティブについては、まず第一に、通常の男性や女性が持つ量をはるかに超える力を体内に蓄えている人、あるいは通常の男性や女性が蓄えている力とは質の異なる力を蓄えている人として説明されている。

第二に、条件が適切である場合、自分の近くにいる人々からさらに多くのその力を引き寄せることができ、その結果、その力が一時的に自分へ集中する人として説明されている。

言い換えれば、物理現象のためのセンシティブとは、物理現象——物質化現象を含む——の発生

に用いられる力に対して、一種の蓄電池のような役割を果たす存在であるとされている。

さらに、この特殊な目的のために必要とされる高度に発達したセンシティブは、通常の間人が持つものと比較して、追加の神経中枢を備えていることが将来発見される可能性も決して低くはない。

しかし、この仮説が最終的に証明されるか否かにかかわらず、次の点についてはほとんど疑いの余地がないように思われる。

すなわち、

「センシティブと非センシティブとの差異を生み出している力が何であれ、それは確かに精神的あるいは磁気的な性質を持つものであり、すなわち精神と磁気の微細な要素の結合体である。したがって、

それは心理的な性質のものであって、純粹に物理的な性質のものではない。」

ということである。

しかし、なぜセンシティブが必要なのだろうか、とあなたは尋ねるかもしれない。

少し電話のことを考えてみてほしい。

あなたは、電話線の端をただ手に持っているだけの人と連絡を取ろうとしている。

その結果、その人はあなたの言葉を一言たりとも聞くことができないのである。

なぜだろうか。

それは、その人が電話線の先に「受話器」を取り付けるのを忘れているからである。

その受話器とは、あなたの声によって生じた振動を集め、集中させる装置である。

そして、その受話器を耳に当てれば、たちまちあなたの声をはっきりと聞くことができる。

しかし、それがなければ、あなたの伝えようとした言葉は失われてしまう。

そして、私たちの実験におけるセンシティブの役割も、まさにこれと同じであると言われている。

なぜなら、センシティブは、現象を発生させるために用いられる力を集め、集中させる「受信器」として働くからである。

また、その感受性の程度がそれぞれ異なるため、他の領域にいる存在たちは、その能力を利用して、このような現象を成功裏に生み出すことができるのだと説明されている。

そして最後に、私たちは十二人から十六人ほどの真剣で心から協力的な男女を必要とする。

できれば科学的な訓練を受けた人々が望ましい。

しかも、全員が最良の健康状態にあることが必要である。

彼らは、いかなる不正行為の可能性についても嚴重に警戒しながらも、同時にセンシティブとして働いている人に対して深い共感を抱いていなければならない。

そして実験中は終始、その人に向けて親切で好意的な思いを送り続けなければならない。

なぜなら、「思念は実体である」と言われているように、敵意に満ちた思念は、こうした特別な体質を持ち高度に発達した人物——すなわち物質化現象を生み出すセンシティブ——の存在下で起こるあらゆる物理現象の実証を弱めるだけでなく、実際に阻止してしまう可能性さえあるからである。

私は、これらの男女をシッター達(THE SITTERS)と呼ぶことにする。

私たちは通常、男女の人数ができるだけ同数になるように選ぶ。

さらに、積極的な気質を持つ人と消極的な気質を持つ人との人数も均等になるよう努める。

このようにして、私たちはシッター達を強力な人間電池として構成するのである。

もしその電池が適切に組み立てられ、その構成員が健康であるならば、彼ら全体から放出される力は、私たちの実験において非常に大きな助けとなる。

しかし健康状態が悪い場合、その男女は私たちにとって役に立たないことが分かっている。

なぜなら、そのような人から必要な力を得られると期待することは、放電してしまった蓄電池から電気火花を発生させようとしたり、磁力を失った鋼片で針を拾い上げようとしたりするのと同じくらい無理なことだからである。

私たちは常に、

「自然法則のあらゆる現れは、自然な条件の結果である」

ということを忘れてはならないと教えられている。

また、私たちが理想的な条件と呼べるものを整えようとするならば、細かな点についても極めて慎重に考慮しなければならないことが分かっている。

椅子は全体が木製でなければならない。

特に、座面に穴の開いたオーストリア式の曲木椅子が、この目的には最も適していることが証明されている。

シッター達は、実験開始予定時刻の二時間前に入浴し、その後着替えを行うべきである。

女性は白い服に着替え、男性は濃色のスーツに着替える。

そしてその後すぐに軽い食事を取らなければならない。

肉類とアルコールは厳しく禁じられている。

それは、実験中に身体へかかる負担が、彼らの健康に悪影響を及ぼさないようにするためである。

このような事柄は、一般の人々には取るに足らない
ことのように思われるに違いない。

しかし私たちは、可能な限り最良の条件を得るため
には、それらすべてを極めて慎重に実行しなければ
ならないと教えられている。

なぜなら、シッター達の最も重要な目的は、自分た
ちが生み出すことのできるあらゆる力、しかも可能
な限り最良の種類のを放出することにあるから
である。

そうすることによって、センシティブおよびシッター
達自身から、十分な量の適切な物質を集めること
ができる。

そして、その集められた物質によって、一時的な身体が形成されるのである。

その身体は、彼らの前に物質化することを望むいかなる存在にとっても使用可能なものとなるのである。

第Ⅱ章

不正行為に対する予防措置

「真実であるにはあまりにも不思議すぎる、ということはない。」——ファラデー

さて、私たちはいよいよ、典型的な物質化実験の集まりにおいて何が起こるのかを見る準備が整った。

私はそのような集まりに何百回も立ち会ってきた。

しかも、その目的のために六人ものセンシティブの協力を得ることができたのである。

そこで私は、私が理想的であると考え実験会——理想的な(検証用の)条件のもとで行われる会合——について説明してみようと思う。

私たちの想定上の検証実験は、かつてロンドンで実際に行われたことがあるように、完全に空き家となっている家で実施されることにする。

しかも、その家には私たちの誰一人としてこれまで入ったことがないものとする。

私たちは、この特別な実験のためだけにその家を借りるのである。

こうすることによって、隠し落とし戸、大型の鏡、その他その種の好ましくない仕掛けが使われる可能性については、完全に防止できると確信することができる。

私は読者に、これから私たちが参加しようとしているのは純粹に科学的な実験であるということを忘れないでいただきたい。

そして、私の説明がどれほど退屈に思われようとも、この想定上の会合が行われる部屋については、実際の検証実験のための部屋を準備する時とまったく同じように、私は非常に綿密な不正防止策を講じるつもりである。

なぜなら、私は不正行為の入り込む可能性を少しでも残したくないからである。

もしそのような余地を残せば、私たちの時間は無駄になってしまう。

さらに私は、この会合に参加する人々——シッター達であろうとセンシティブであろうと——による不

正行為を防ぐためにも、同じように徹底した予防措置を講じるつもりである。

そして、その扱いがどれほど厳しく見えようとも、私は全員をまったく同じように扱う。

しかし、このように重大な問題においては、私は誰一人として無条件に信用することはできない。

私は、この会合に参加するすべての人が、不正な現象を作り出すことに加担する能力を持っているものと仮定しなければならない。

シッター達もセンシティブも例外ではない。

そして私は、この想定上の会合に出席している誰であっても、不正行為を行うことが絶対に不可能になるような事前の予防措置を講じるのである。

この態度は厳しすぎるように見えるかもしれない。

しかし、この問題のように極めて重大な事柄に対して、偏見のない研究者が取り得る態度はこれ以外にはない。

なぜなら、この問題は、人間としての私たちの存在の根本に関わるものだからである。

それは生命の起源と、その——可能性としての——継続性に関わる問題である。

さらにそれは、私たちの社会制度と法制度の根幹にまで及ぶ。

そしてまた、さまざまな宗教の根本そのものにまで関わる問題なのである。

なぜなら、私たちはこの実験の間、ある一つの主張された事実を扱おうとしていることを忘れてはならないからである。

それは、別の領域に存在する存在たちが、目に見え、しかも触れることのできる身体をまとして地上へ戻って来ることが可能であるという主張である。

しかも、それらは推論し、思考する存在であり、他の領域での自らの生活について私たちに語ることができるとされている。

さらに彼らは、私たちが神聖なものとして受け入れている多くの事柄が誤りであると主張するのである。

したがって私たちは、その主張された事実が真実なのか、それとも虚偽なのかを証明できるようにす

るため、人間の知恵によって考案し得る限り最も厳格な検証方法を要求しなければならない。

私の考えでは、このほとんど知られていない研究分野へ初めて足を踏み入れる研究者にとって、それ以外の道は存在しないのである。

この主張された事実を検証するために私がロンドンで開催した実験会には、実に膨大な数の人々が参加した——信じ難いほどの人数であった。

参加者はイギリス全土から集まり、さらにヨーロッパ各地、カナダ、南北アメリカからもやって来た。

また、遠く離れた日本、中国、ビルマ、インド、アフリカ、オーストラリア、その他世界各地からも訪れていた。

しかも、彼らは社会のあらゆる階層に属していた。

王室と極めて親密な関係を持つ人々や、王室関係者もいた。

また、ウォルズリー元帥、キャリントン将軍、アルフレッド・ターナー将軍、ゴードン将軍、そして偉大なゴードン将軍の親族であったバレンタイン・ゴードン大佐などの著名な軍人たち、さらにその他多くの最高位の将校たちも参加した。

また、私の友人であるアズボーン・ムーア海軍中將のような著名な海軍軍人たちもいた。

彼は細心の注意を払う極めて批判的な研究者であり、初めて物質化現象を目撃したのもこれらの会合においてであった。

ロンドンのハーレー街をはじめ各地から集まった著名な医師たちもいた。

その中には陸軍医療部門の著名な責任者であったフォーセット軍医総監も含まれていた。

さらに、地球上のほぼすべての文明国から外交官たちが参加した。

財務省、外務省、インド省、植民地省、陸軍省の官僚たちも出席した。

貴族院議員や庶民院議員も参加し、その政治的立場は知られているあらゆる思想や党派にわたっていた。

また、W・T・ステッドのような著名な新聞人や、世界各地から集まった多くのジャーナリストたちもいた。

作家では、アーサー・コナン・ドイル卿、ジョン・オリヴァー・ホップズ(クレイギー夫人)、フローレンス・マリアットをはじめ、多くの著名な文筆家たちが参加していた。

科学者では、マルコーニのような著名な人物もいた。

さらに、ほとんどあらゆる階級に属し、数え切れないほど多様な信条や教義を持つ著名な聖職者たちも出席していた。

その中には、平信徒に変装し、偽名を使って参加していた者さえいた。

また、有名な俳優や女優、著名な音楽家、歌手、画家、建築家たちもいた。

そして、世間で「著名人」と呼ばれるようなあらゆる種類の男女が、それぞれの分野で名を知られた人物として参加していた。

さらに、そのような称号を自ら主張することのない何百人もの人々も加わっていた。

このように、私たちのロンドンでの実験会には、信じ難いほどの人数が参加していたのである。

したがって、その膨大な参加者の中には、もしかするとあなた自身も含まれていたかもしれない。

あなたは一度、あるいは何度かその会合に参加したことがあり、そして今、こう考えているかもしれない。

すなわち、自分が参加を許された会合では、これから私たちが参加しようとしている想定上の会合で、私がシッター達とセンシティブに課そうとしている条件ほど綿密に考え抜かれたものではなかったし、検証方法もそれほど厳格ではなかった、と。

それは十分にあり得ることである。

なぜなら、私の三つの研究協会が開催していた通常の実験会において課されていた条件は、検証実験会で要求されていた条件とは大きく異なっていたからである。

たとえば、フローリー・クック(コーナー夫人)との実験会のような場合には、参加者は単に会員に限定されていただけでなく、特別に選ばれた会員のみに厳しく制限されていた。

また、ここで覚えておいていただきたいのは、私が今説明しているのは、私自身が出席した特定の会合で実際に課された条件や得られた結果ではないということである。

むしろ私は、物質化現象のための真に科学的な実験において備えられるべき条件、そして取られるべきであると私が考える不正防止策について述べているのである。

さて、私たちはあらかじめ定められた時刻に、その夜のために借りた空き家の玄関ホールへ全員集合する。

ただし、センシティブだけは例外である。

センシティブは、それより三十分遅れて入室することになっているため、この時点ではまだ家に入ることが許されていない。

まず、どの部屋を会合に使用するかについて採決が行われる。

そして部屋が決定すると、私たちは全員でそこへ向かい、一緒に部屋へ入る。

すると、二階にある広く天井の高い部屋であり、その中には何一つ置かれていないことが分かる。

窓の外を見ると、下の通りまでおよそ五十フィート（約十五メートル）の切り立った落差がある。

しかも、そのすぐ近くには他の建物がまったく存在しない。

そのため、誰かが窓から部屋へ侵入したり、逆に窓から退出したりすることは完全に不可能であると私たちは判断する。

次に、部屋そのものへ注意を向ける。

そこには何もない四方の壁があり、そのうちの一面にはガス灯の取り付け金具が備え付けられている。

さらに天井があり、暖炉があり、頑丈な床がある。

まず、これらは専門家によって綿密に調査されなければならない。

そして次に、部屋への出入口となる箇所——すなわち扉、窓、暖炉——が調査される。

私は意図的に、シッター達の中へ著名なロンドンの医師を一人、そして同じく著名なロンドンの建築家を一人加えている。

彼らは、かつて実際にそうであったように、詐欺が持ち込まれない限り結果など得られるはずがないと考えているほど極めて懐疑的な人物である。

さらに私は、第二視覚(透視あるいは霊視)の能力を高度に発達させた二人の人物も参加させている。

そして、私がロンドンで実験を行っていた際にしばしばそうしたように、この会合でも彼ら全員の能力を大いに活用するつもりである。

私たちはその部屋の鍵をあなたに渡す。

そして、建築家とあなたを除く全員が部屋を退出する。

その後、建築家が空の部屋について専門的かつ綿密な調査を行う間、あなたは彼を注意深く監視する役目を負う。

調査が終わると、建築家は報告書を作成する。

そしてあなたと彼はその報告書に署名し、

「私たちの判断では、この部屋には何らの仕掛けも施されておらず、完全に通常の状態にある」

という内容を証明するのである。

その後、あなたは部屋の鍵を開けて署名済みの報告書を外へ渡す。

すると私たちは直ちに、十七脚の椅子、大型の写真用ランプ、そしてそのランプと壁に取り付けられたガス灯金具を接続するためのゴム管をあなたへ渡す。

さらに、暖炉の開口部へぴったりとはめ込める丈夫な木製の覆い板と、それをしっかり固定するための長いネジおよびドライバーも渡す。

また、窓を覆って作用光線(アクチニック光線)を完全に遮断するための濃色の布またはラシャ布、それを取り付けるための金槌と釘も渡す。

さらに、小型のハーモニウムと演奏用の椅子を部屋へ押し込む。

これらの品々を受け取ると、あなたは再び部屋に鍵をかける。

そして建築家とともに、それぞれの品物を詳細に検査する。

その結果、どの品物にも仕掛けが施されていないことに二人とも納得すると、第二の報告書を作成する。

そして二人で署名し、

「これらの品物の中には何一つ隠されておらず、また何かを隠しておくことも不可能である」

という内容を記載する。

その後、二人は部屋を出て、扉に鍵をかける。

そして鍵は引き続きあなたが保管する。

このようにして、実験を行う部屋と、その中に置かれるすべての品物についての確認が終わったので、次に私たちは実験に参加する人々全員を対象とする確認へ進む。

すなわち、医師、建築家、あなた自身、私自身、そして残りのシッター達である。

男性も女性も区別なく、全員がまったく同じ扱いを受ける。

それがどれほど厳しく思われようとも、この問題ほど重大な事柄においては誰一人信用することはできないからである。

医師は、シッター達を一人ずつ隣室へ連れて行く。

そこで、その人は衣服をすべて脱ぐ。

そして医師は、その人物が身体や衣服の中に、不正な現象を作り出すために利用できる物を隠し持っていないかどうかを慎重に調べる。

この徹底的な検査が終わると、そのシッターは再び服を着ることを許される。

その後、あなたが部屋の鍵を開けてその人を中へ入れ、入室後には再び鍵をかける。

こうしてシッター達は順次部屋へ入れられるのである。

やがてセンシティブが家へ到着する。

すると医師が彼を迎え、隣室へ連れて行く。

そして直ちに、センシティブの身体に対して徹底的な検査を行う。

彼の衣服はすべて取り上げられる。

そして検査が終わると、その晩のために一式の衣服が貸し与えられる。

これは、彼自身の服に秘密のポケットなどが作られている可能性を排除するためである。

センシティブが女性である場合も、まったく同じ扱いを受ける。

彼女の衣服はすべて取り上げられる。

そして実験中に着用するための黒いドレスだけでなく、黒い下着一式までも貸与される。

さらに、白いハンカチさえも部屋へ入る前に取り上げられる。

その結果、彼女が白い衣をまとった存在になりすまして現れることは、完全に不可能となるのである。

検査が終了し、着替えも完了すると、あなたは扉の鍵を開け、センシティブは初めてその部屋へ入ることを許される。

これで医師を除く全員が部屋の中にそろったことになる。

そこで次に、誰が部屋を出て医師を慎重に検査するかを採決によって決める。

そして、そのシッターだけが部屋の外へ出ることを許される。

検査が終了すると、医師とそのシッターは部屋へ戻って来る。

その後、扉は最終的に鍵をかけられ、さらに門(かんぬき)も掛けられる。

そして、その夜の間ずっと鍵はあなたが保管するのである。

もちろん、それ以前に暖炉の上の棚に置かれた大型ガスランプには火が灯されている。

そして今、その炎は最大まで明るくされる。

センシティブは、扉、窓、暖炉から最も離れた部屋の隅に置かれた椅子へ腰掛ける。

シッター達は十六脚の椅子を彼の周囲に半円形に配置する。

そのため、センシティブが椅子から抜け出して部屋の中へ移動しようとするならば、シッター達を乗り越えて行かなければならない。

次に、建築家へ糊付きの紙片とスチログラフィック・ペン(インク式筆記具)が渡される。

建築家とあなたは、その紙片を扉、窓、暖炉の周囲へ貼り付ける。

そして、その紙片の上に、自分たちだけが知っている任意の単語や文字を書き込む。

こうしておけば、もし誰かがそれらに手を加えた場合には、紙が破られたことを直ちに見抜くことができる。

音楽の心得のあるシッターの一人は、一時的にハーモニウムの前へ座り、適切な音楽を演奏し始める。

こうして私たちは実験を開始する準備が整う。

部屋にいる全員の共通した感覚は、考え得る限りの不正防止策がすべて講じられたというものである。

したがって、もし何らかの結果が生じるならば、それは間違いなく本物であるに違いない、という確信が皆の中にある。

シッター達は、それぞれ積極的な気質の人物と消極的な気質の人物が隣り合うように席を割り当てられている。

そして私たちは手をつなぐ。

こうして、私たちは強力な人間電池を形成するのであると説明されている。

もちろん、半円の両端に座る二人だけは、それぞれ片手を自由にしておく。

そして、その二人の自由な手から、この人間電池によって生み出され放出された力が、センシティブの左右両側へ流れ込むのだと言われている。

私たちは椅子に静かに腰掛け、互いに穏やかな声で会話を続ける。

すると間もなく、冷たい風が私たちの手の上を吹き抜けるのを感じるようになる。

さらに二分ほど経つと、その風は著しく強まり、もはや強風と呼んで差し支えないほどになる。

この時点でセンシティブを見ると、彼が急速にトランス状態へ入りつつあることが分かる。

頭は片側へ垂れ下がり、腕と手は力なくぶら下がっている。

身体全体は完全に弛緩した本物のトランス状態となっており、私たちは、それが彼を通して働こうとする存在に利用されるのにちょうど良い状態であると説明される。

私が実験を行ったセンシティブの中で、トランス状態へ入らなかった人物はただ一人だけであった。

その人物はシッター達の中に座ったまま、実験の全期間を通じて完全に正常な意識状態を保っていた。

そして、自分のすぐ横で物質化した姿が形成されていく様子を見守りながら、その存在たちと会話を交わっていたのである。

私は後ほど、その人物について触れることにしよう。

ここで私たちは、霊視能力者たちに観察を始めさせる。

そして、一人が述べた内容は、その瞬間に何が起きているかについて、もう一人の述べる内容によって細部に至るまで確認されなければならない。

そうでなければ、彼らの発言は考慮に入れないのである。

二人の霊視能力者は、今度は同じ報告を行う。

彼らによれば、センシティブが男性である場合にはその左側から、女性である場合には骨盤部から、薄い白い霧、あるいは「蒸気」のようなものが出ているのが見えるという。

そしてその霧は、センシティブの左側に最も近い半円の端に座っているシッターへ流れ込んでいく。

さらに彼らの説明によれば、その霧はシッター第1番から第2番へ、次に第3番へというように順番に移動していく。

そして十六人すべてのシッター達を通過した後、最後にセンシティブの右側に最も近い半円の端に座っている第16番のシッターから離れ、センシティブの右側へ吸い込まれるように消えていくのである。

私たちは、この観察から次のように考える。

すなわち、これらの一時的な身体を形成するために必要な神経力、磁氣的な力——あるいは、あなたがどのような名称で呼ぼうとも——は、まずセンシティブから出発する。

そして各シッターを順番に通過しながら、その時点で各人が放出できるだけの力やエネルギーを取り込み続ける。

その結果、その力は大幅に増大した状態で再びセンシティブへ戻り、次の過程で利用される準備が整うのである。

そこで私たちは、この段階を、一時的な身体をまとった存在が形成される過程における三つの段階のうちの第一段階と呼ぶことにしよう。

二人の霊視能力者は、今度は同じ報告を行う。

彼らによれば、センシティブが男性である場合にはその左側から、女性である場合には骨盤部から、薄い白い霧、あるいは「蒸気」のようなものが出ているのが見えるという。

そしてその霧は、センシティブの左側に最も近い半円の端に座っているシッターへ流れ込んでいく。

さらに彼らの説明によれば、その霧はシッター第1番から第2番へ、次に第3番へというように順番に移動していく。

そして十六人すべてのシッター達を通過した後、最後にセンシティブの右側に最も近い半円の端に座っている第 16 番のシッターから離れ、センシティブの右側へ吸い込まれるように消えていくのである。

私たちは、この観察から次のように考える。

すなわち、これらの一時的な身体を形成するために必要な神経力、磁氣的な力——あるいは、あなたがどのような名称で呼ぼうとも——は、まずセンシティブから出発する。

そして各シッターを順番に通過しながら、その時点で各人が放出できるだけの力やエネルギーを取り込み続ける。

その結果、その力は大幅に増大した状態で再びセンシティブへ戻り、次の過程で利用される準備が整うのである。

そこで私たちは、この段階を、一時的な身体をまとった存在が形成される過程における三つの段階のうちの第一段階と呼ぶことにしよう。

****蒸気の段階(THE VAPOUR STAGE)****

しばらくすると、二人の霊視能力者は再び同じ報告を行う。

彼らによれば、その力あるいはエネルギーは、センシティブが男性である場合にはその側面から、女性である場合には骨盤部から、白く柔らかい、練り粉のような物質となって現れ出ているという。

私はかつて一度だけ、その物質に触れることを許されたことがある。

そこからは何の臭いも感じられなかった。

触れた感じは冷たく湿っており、その時の感触は重い練り粉とよく似ていた。

この練り粉のような塊こそが、一時的な身体を作り上げようとする存在たちによって用いられる材料であると言われている。

通常は一体ずつ順番に、この物質を利用するのである。

この塊は、使用されるまでセンシティブの右側近くの床の上に留まっているように見える。

そして、その大きさは、実験中にシッター達が放出する力の量によって左右されるようである。

これを私たちは、一時的な身体をまとった存在が形成される過程における三段階のうちの第二段階と呼ぶことにしよう。

****固体ではあるが形を持たない段階(THE SOLID, BUT SHAPELESS STAGE)****

私たちは、姿を現そうとしている存在が、この形のない練り粉状の塊の中へ入り込むのだと説明される。

すると、その塊は直ちに体積を増し始める。

そして脈動しながら上下に動き出し、高さを増すにつれて左右へ揺れ動く。

その動きを生み出している力は、明らかに塊の下部に存在しているように見える。

次に、その存在は素早く作業に取りかかり、その塊を人間の身体に似た形へと作り上げ始める。

まず最初に形成されるのは頭部である。

続いて上半身の残りの部分が形作られる。

この段階になると、心臓の鼓動と脈拍が正常かつ規則正しく打っていることを確認することができる。

この点において、それはセンシティブの状態とは異なっている。

なぜなら、この時にセンシティブを検査すると、その心拍数も脈拍数も通常よりかなり高くなっていることが分かるからである。

脚と足は最後に形成される。

そしてそれが完成すると、その存在はセンシティブのすぐ近くを離れ、シッター達の間を歩き回ることができるようになる。

こうして、その存在の進化過程における**第三にして最後の段階**が完成するのである。

存在は時として、自らが地上に生きていた時に着用していたと主張する衣服とまったく同じ服装をまとうて現れることがある。

特に、それが軍服や海軍の制服のような少し珍しいものであった場合には、その傾向が見られる。

しかし通常は、驚くほど柔らかな質感を持つ、ゆったりとした白い衣をまとって現れる。

そして私は、この衣にも触れることを許されたことがある。

私たちの二人の透視能力者は、物質化の過程において常に、おそらくその粘土状の物質と思われる細い帯が、感応者が男性であればその脇腹から（女性であれば骨盤部から）明瞭に出ているのが見えると断言している。そしてその帯は、存在者が宿っている身体の中央部分につながっており、ちょうど出生時の人間の乳児に付いているへその緒のようなものであるという。また私たちは、この帯は一定の距離、たとえば十フィートから十五フィートほど

以上には伸ばすことができず、それ以上伸ばすと感応者にも存在者にも害を及ぼすと教えられている。もっとも、条件が異常に良好であった場合には、感応者からおよそ六十フィート近く離れた場所で物質化した姿が目撃された事例も記録されている。

この段階で物質化した身体のさまざまな部分に触れてみると、その肉体は温かく、しかもしっかりとした感触を持っていることがわかる。身体の均整はよく取れており、女性の身体——彼らはこの過程の中で性別の特徴を帯びるのであるが——は美しい体形をしている。そして手、腕、脚、足も、その造形においてまったく見事である。しかし私の意見では、私が至近距離で注意深く観察したり、あるいは触れることを許されたりしたあらゆる物質化存在の身体、頭部、手足は、性別や年齢にかかわらず、実際の身長を除けば、地上にいる同じ性別・同じ年

齡の人間が持つものより少なくとも三分の一ほど小さく見えた。

私たちは、シッター達が本人確認を行うためだと彼ら自身が語るように、老齡の特徴をすべて備えた男女の高齡の存在者が物質化するのを目撃しただけでなく、物質化した乳児も見ている。そしてある時には、二人の死産児が同時に私たちの前に現れたことがあった。そのうちの一人は、その未熟児として生まれた時に持っていた恐ろしい奇形の痕跡を、その小さな顔にはっきりと残していた。その奇形のこと、その晩たまたまシッター達の一人として出席していた母親だけが知っていたのである。

私たちは、本人確認のために、存在者は自分が死んだ時に身につけていたと主張する身体とまったく同じ姿で地上へ戻って来るのだと教えられている。そして、それによってその場にいる親族や友人たち

に認識されるのである。したがって、幼児として地上を去った者は、たとえ死後二十年あるいは三十年が経っていたとしても、物質化した身体では幼児の姿で現れる。高齢の男性や女性は、腰を曲げ、顔にしわを刻み、雪のように白い髪をした姿で現れ、死ぬ前にそうであったと彼らが語るとおり、歩くのにも苦勞しながら私たちの間を歩くのである。

その死が二十年前であったとしても同様である。地上生活の間に手足を失った者は、その手足のない姿で戻って来る。事故や病気によって容貌を損なわれた者は、その損傷のはっきりした痕跡を携えて戻って来るが、それは本人確認のためだけなのである。

しかし、ひとたび本人確認が無事に成立すると、そのすべてはたちまち変化する。損傷は消え去り、失

われていた四肢は完全に見えるようになる。そして乳児も高齢者も、その後は人生のまさに最盛期の姿で私たちの前に現れるのである。私たちの言い方をすれば、若者は上へ向かって成長し、高齢者は下へ向かって若返る。

そして彼らは例外なく、しかも非常に強い口調で、それこそが彼らが現在存在している界層において実際に見える姿であり、実際に感じている姿なのだと言っているのである。

これらの一時的な身体に宿っている間、彼らは単に性別上の特徴を帯びるだけでなく、一時的に地上の身体的条件までも身につけるのだと言っている。

というのも、彼らの身体が何らかの形で傷つけられると、実際に痛みを感じているように見えるから

である。また、室温が華氏六十度(約十五・六度)を大きく下回ると寒さを訴え、反対に七十度(約二十一度)を超えると暑さを訴える。さらに、大気中に電気が過剰に満ちている雷雨の際には気分が沈んでいるように見え、外の世界が厳しい霜に閉ざされている時でも、暖かい部屋の中では明るく幸福そうに見える。また、星の輝く晴れた夜にも同様に快活な様子を見せる。

それだけではない。彼らはまた、一時的にはあるが、地上に存在するさまざまな人種の顕著な特徴までも身につけるのである。

白色人種の物質化した存在者は、黄色人種や褐色人種の存在者とははっきりと異なっており、その違いは、黄色人種や褐色人種が黒色人種と異なっているのと同じほど明白である。そして私たちに話しかける際には、それぞれが地上で属していた民族

に特有の言語のみを用いて意思を伝えるのである。

一度の実験会において、五つ、六つ、さらには七つもの全く異なる言語が用いられたことがあった。その感応者は生涯一度もイングランドの外へ出たことがなく、英語以外の言語をまったく知らないことが決定的に証明されていた人物であった。

私たちが聞かされたところによれば、この七言語という数は、その場に出席していたある船医に敬意を表して用いられたものであった。そして、その事実は当時私たちの誰も知らなかったのであるが、その船医は実際には卓越した語学者であることが判明した。というのも、その晩彼はさまざまな存在者たちと、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、中国語、日本語、そしてインドのある山岳民族の言語によって会話を交わしたからである。

別の機会には、ロンドンで開かれた午後の実験会において、私だけが唯一のヨーロッパ人として出席していたことがあった。その会はボンベイから来た男女八人のパールシーによって開かれたものであったが、会が続いた二時間十五分のあいだ、存在者たちとパールシーのシッター達は終始ヒンドウスターニー語で会話を続けていた。

その中では、二人の存在者が同時に、一人のパールシーの男性と激しい論争を繰り広げた。その論争は死者の遺体の処置方法をめぐるもので、ほぼ三分間続いた。存在者たちは、遺体をハゲワシに食べさせる慣習に反対し、火葬だけを主張していたのである。そしてその議論の最中に彼らが立てた騒音は、ほとんど耳が聞こえなくなるほどの大きさであった。

その感応者については、英語以外の言語をまったく知らないことが決定的に証明されていた。また彼がイギリス諸島の外へ出たことがあるのはただ一度だけで、それもフランスへ短期間旅行した時だけであった。

第Ⅲ章

実験による検証

「事実の前には幼い子供のように座りなさい。あらゆる先入観を捨てる覚悟を持ちなさい。自然が導くところならどこへでも、またどれほど深い淵へであっても、謙虚に従いなさい。さもなければ、あなたは何一つ学ぶことができないだろう。」

——トーマス・ハクスリー

このあまり知られていない研究分野において、七年間にわたる実験研究の期間中、非常に有能な六人の感応者の協力を得て、私と私の共同研究者たちは数多くの検証実験を経験した。その検証はあまりにも数が多く、またその内容も極めて多種多様であったため、公式記録簿やその他の記録に残された何百もの事例の中から、どれを選べば探究者

たちにとって最も興味深いものとなるのかを決めるのはなかなか難しい。

しかし私は、それらの記録の中から十件を抜粋した。そして、それに加えて、サー・ウィリアム・クルックスが自ら立ち会った実験について報告した記録からいくつかを引用することにした。

私の考えでは、それだけで十分に、これらの驚異的な現象を目撃した私たちが、幻覚を見ていたのでも、精神に異常をきたしていたのでも、嘘をついているのでもないことを証明できるはずである。なぜなら私たちは、別の界層から来た存在者たちが一時的に使用するために構築した物質化した身体を、実際に見ただけでなく、実際に触れてもいと厳粛に断言するからである。

そして、ここに記されるすべての記述は、私の知る限り、また信じる限りにおいて、その細部に至るまで真実である。

****実験第 1 号****

場所——ハンプシャー州ニューフォレスト、リンドハースト。感応者 A、男性、年齢約四十六歳。

簡単ではあるが、極めて厳格な検証実験の一例として、まず私と一人の共同研究者に対してニューフォレストの外れで行われた実験を記録しておきたい。これは、いかなる特別な準備もまったく施されていなかった実験である。

その感応者は、ほとんど盲目に近い男性であった。私たちは暗い夜に、彼をまったく未知の場所へ連れて行った。彼は列車でロンドンから到着したばかり

りであり、その場所について何も知らなかった。そして私たちは彼を大型の移動式キャラバンの中へ案内した。

そのキャラバンは彼がこれまで一度も近づいたことのないものであった。なぜなら、それはごく最近になって製造業者の手を離れたばかりだったからである。

私はその日の昼間、キャラバンの内部を徹底的に調査し、誰も中に隠れていないこと、また隠れることも不可能であることを確認していた。その後、私は扉に鍵をかけ、その鍵をポケットに入れたまま保管していた。そして感応者が到着した時になって初めて私が扉の鍵を開け、私たちは全員一緒にキャラバンの中へ入った。

その後、私は自分たちの後ろで扉に鍵をかけ、さらに門まで掛けた。

すでに述べたように、この実験のためにはいかなる準備も行われていなかった。

これは単に、この感応者を通じて、極めて困難な条件の下で何かが生み出されるかどうかを確かめたいという願いから行われたものであった。しかもその条件は、私たちが失敗は確実だと考えるほど、まったく不利なものであったのである。

私たちは、感応者や自分たちが座るための椅子すら一脚も持っていなかった。そのため、感応者のためにはキャラバンの台所部分に据え付けられていた鉄製の調理レンジの上に板を渡して席とし、私たちはキャラバンの居住部分で寝台として使われていた二つの長椅子に腰掛けた。

音楽はなく、選り抜かれた多数のシッター達による強力な「人間電池」のような助けもなかった。実際、条件は考え得る限り最悪に近いものであった。

それにもかかわらず、私が後ろ手に扉に鍵をかけてからわずか十分以内に、一人の背の高い男性の姿が私たちの前に立った。その男性は非常に長身であったため、キャラバンの二つの区画を隔てている高さ六フィートの仕切りの下を通る際には、頭をかがめなければならなかった。

彼はこう言った。

「私はエジプトの____の戦いで、あなた方の言うところの『戦死』をした____大佐です。私は地上で生きていた長年のあいだ、物質化現象に深い関心を抱いていました。そしてイングランドで過ごした人

生最後の夜を、まさにこの感応者との実験に費やしたのです。そのため、たとえあなた方お二人が私にとって見知らぬ方々であるとしても、この人を通じて再び戻って来られたことを大変うれしく思います。

私が感応者本人が変装してあなた方の前に立っているのではないことを証明するために、どうかこちらへ来て私のすぐ近くに立ってください。そしてご自身でその問題に決着をつけてください。」

私は直ちに立ち上がり、彼のすぐ横に立った。ほとんど身体が触れそうなほど近い距離であった。

すると私は、その顔立ちや肌の色合いが感応者のものとはまったく異なっているだけでなく、その男性が私よりもはるかに背が高いことに気づいた。私の判断では、身長はおよそ六フィート二インチから

三インチ(約一八八～一九〇センチ)ほどであり、感応者よりも、また私自身よりも、確実に四インチ(約十センチ)ほど高かった。

こうして彼の横に立っている間、感応者から約八フィート離れていたにもかかわらず、私たちは二人とも、その気の毒な感応者が台所のレンジの上に設けられた硬い席の上で落ち着きなく身じろぎし、苦痛を感じているかのようにため息をついたり、うめいたりしているのを聞くことができた。

その存在者はおよそ三分間私たちと共にいたが、その後、やや細身の若い男性と交代した。その若者の身長は約五フィート九インチ(約一七五センチ)で、最近亡くなった王族の一員であると名乗った。

彼は柔らかく心地よい声で私たちと話し、最後には私の同行者の耳元で個人的な伝言をささやいた。そして、その伝言を彼の母である女王へ届けてほしいと頼んだ。

****実験第 2 号****

場所——ロンドン南東部ペッカム・ライ。感応者 A、男性、年齢約四十六歳。

キャラバンの所有者と私は、この感応者に対して、ほとんど同じくらい絶望的と思われる課題を与えた。

それは七月のよく晴れた日の正午に行われた実験であった。窓のブラインドは下ろしてあったが、その縁の隙間から太陽光が差し込み、さらに重い窓カーテンの上部、側面、下部からも光が漏れ込んで

いた。私たちは実験中に日光を遮ろうとして無駄な努力をし、カーテン同士をピンで留めていたのである。

それにもかかわらず、再び、しかも私たちが完全に望みがないと考えていた条件にもかかわらず、十分も経たないうちに一人の男性の姿が現れた。

その存在者は頭先从から足の先まで完全に物質化しており、そのことは彼自身が下肢を見せることで私たちに証明した。

彼は感応者のそばを離れ、部屋の中へ歩み出て、私たちの間に立った。そして深く豊かな声で、ほぼ三分間にわたって私たちに話しかけた。

彼が私たちのそばに立っている間、約十二フィート離れた場所にいる感応者が椅子の上で落ち着きな

く身動きし、ときおり小さくうめいているのを私たちは聞くことができた。

彼が姿を消してから五分後、同じ(本人がそう名乗る)最近亡くなった王族の一員が再び私たちのもとへ歩いて来て、私の同行者と短い私的な会話を交わし、さらにもう一つの伝言を母である女王へ届けてほしいと託した。

****実験第 3 号****

場所——ロンドン北西部ウェスト・ハムステッド。感応者 B、女性、年齢約四十九歳。

数年前にイングランドにいた中年あるいはそれ以上の年齢の人々であれば、有名な奇術師に対して二件の訴訟が起こされた当時の騒ぎをよく覚えているだろう。その訴訟は、その奇術師の最も不可解

な手品の一つを暴くことに成功した有能な若者によって提起されたものであった。そして両方の裁判で奇術師に不利な評決が下されたことは、大きな世間の話題となった。

その若者——ここでは X 氏と呼ぶことにする——は、当時最も腕利きの奇術師の一人を打ち負かした人物として、たちまち有名になったのである。

私の友人の一人は、前述したサー・ウィリアム・クルックスの感応者であるフローリー・クック(後のコーナー夫人)、すなわち先に感応者 B として述べた女性が、ロンドンにある私の家でガス灯の明かりの中、何度も物質化現象を起こした際に立ち会っていた。

その友人はある晩、自宅のウェスト・ハムステッドの家へ彼女を招き、数人の友人たちと会わせるととも

に、自分の家の応接間でも存在者の物質化が可能かどうかを確かめたいと考えた。

彼女は直ちにその招待を受け入れ、厳重な検証条件のもとでその場に座ることに同意した。

実験の日の一、二日前に友人たちとこの件について話し合った際、彼は私に次のような計画を立てていると話した。

感応者を椅子にしっかりと縛りつけること。

床板には頑丈な鉄の輪を固定し、その輪の中に縄を通すこと。

そしてその縄を感応者の脚にしっかりと結びつけること。

さらに、大きさや種類を問わずすべての結び目に封印を施し、感応者が椅子から抜け出して物質化した存在者を装うことが絶対にできないようにすること。

彼の友人の一人は、かの有名な X 氏と知り合いであった。そして X 氏は、つい最近、あれほど名高い奇術師を打ち負かしたばかりであったため、この実験への立ち会いを依頼されたのである。

さらに彼には、縄で縛る作業、拘束作業、封印作業のすべてを全面的に任せることになった。それによって、感応者が椅子から脱出することを完全に不可能にしようとしたのである。

私がその応接間の一同に加わった時、紹介された X 氏は、自分で持参した縄やテープを使って感応者を縛り上げる作業に忙しく取り組んでいた。そし

て、すべての結び目に特別な封蝋を施し、さらに主人が用意した印章によって封印していた。

部屋は広く、その一方の端にあった家具はすべて片付けられていた。その空いた空間の中央には、椅子に座った感応者と、熱心に作業を続ける X 氏だけが見えていた。

さらに十五分ほど真剣な作業を続けた後、主人が X 氏に、

「感応者が椅子に確実に固定されていると、完全に満足されていますか」

と尋ねた。

すると彼は、

「これほど嚴重に固定されているのですから、もしこのような条件下で何らかの現象を起こすことができるなら、私は直ちにその現象が本物であることを認めます」

と答えた。

この間ずっと、感応者は完全に平常の状態にあり、少しも取り乱してはいなかった。ただ一つ心配していたのは、私たちが照明を暗くするのではないかということであった。彼女は暗闇を非常に恐れていたのである。

X氏は最後に自分の仕事の成果を確認するため、一步後ろへ下がって全体を見渡した。そしてその後、ガス灯の明かりの下に座っている感応者のすぐ近くまで歩み寄った。

彼は片手をカーテンの上部へ伸ばし、ガス灯の直接の光が感応者に当たらないよう、カーテンを彼女の周囲へ引き寄せようとしていた。

その瞬間であった。

突然、大きな褐色の腕と手が現れ、その手が重々しく X 氏の肩を叩いたのである。

そして、しわがれた男性の声が大音量でこう尋ねた。

「本当に満足しているのか？」

私はオカルト現象の研究に関連して数々の奇妙な出来事を目撃してきた。しかし、その時の X 氏の顔に浮かんだ、ただただ呆然とした驚きの表情だけは、死ぬまで忘れることはないだろう。

しかし彼はすぐに我を取り戻した。

そして直ちに感応者の状態を調べた。

感応者は小柄な女性で、身長は平均をかなり下回り、手も足も小さいことは、その場にいた私たち全員がはっきりと見ることができた。

調査の結果、彼は、すべての封印もすべての結び目も完全なままであり、自分が六十秒ほど前に残した状態とまったく変わっていないと宣言した。

その晩に物質化した存在者たちの中には、およそ十八歳ほどの若い女性もいた。

彼女は、自分が地上の肉体を離れた時には、アルジェのカフェで踊り子として働いていたのだと語った。

彼女は、感応者が座っていた場所から現れ、心から楽しそうに笑いながらやって来た。そして、先ほどの手と腕は「船長」と彼女が呼ぶ年老いたイギリス人の船乗りのものだと語った。

さらに彼女は、その船長が彼女と一緒に自分たちの界層から縛り付けの作業を見守っており、現象の発生を阻止しようとする X 氏の無駄な試みを見て笑っていたのだと話した。

船長は、X 氏が感応者から離れて後ろへ下がる瞬間に彼を驚かせるため、自分の姿を完全に物質化したいと強く望んでいたという。しかし、手と腕だけを出現させるだけの「力」しか得ることができなかつ

たため、ひどく機嫌を悪くしていたのだと彼女は言った。

そして実際、その通りだったようである。というのも、その若い女性が約十分間私たちと話しているあいだ、ときおり船長のしわがれた声が聞こえてきたからである。その声で彼は、いわゆる「遠慮会釈のない、かなり手荒な言葉」としか表現しようのない言葉を吐き出していたのである。

この実験はおよそ一時間近く続いた。

実験が終了すると、X氏は感応者を調べ、再び、すべての封印とすべての結び目が、実験開始時に自分が残したままの状態であることを報告した。

****実験第 4 号****

場所——ロンドンにある私の家。感応者 D、男性、年齢約三十四歳。

数多くの機会において、この感応者は、赤い紙で覆われたガス灯の明かりの下で、深いトランス状態のまま椅子に座っている姿を、その場にいた全員によって目撃されている。そして、その間、彼が荒い呼吸をしているのが聞こえていた。

その一方で、二人の物質化した存在者が彼のそばに立っているのが見られたこともあった。またある時には、一人の存在者が彼のそばに立ち、もう一人が感応者から五フィートから八フィートほど離れた場所で、シッター達の近くに立っているのが見られた。

さらに、この男性の感応者が私たちと実験を行っていた際には、二人の女性の存在者が同時に現れたこともあった。

そのうちの一人は、十六人のシッター達が作る半円の内側におり、感応者から約八フィート離れた場所で、低く美しい声でシッター達に話しかけていた。

一方、もう一人の女性の存在者は、シッター達の間を通り抜けるか、あるいはその上を越えるようにして移動し、シッター達が作る半円の外側を部屋の中で歩き回った。そして二人のシッター達の後ろまで近づき、彼らに聞こえる声で話しかけただけでなく、輪の内側にいたもう一人の存在者とも短い会話を交わした。

しかも、その二人はほとんど同時に話していたのである。

****実験第 5 号****

場所——ロンドンにある私の家。感応者 D、男性、
年齢約三十四歳。

実験第 4 号で述べた二人の女性の存在者のうちの一人は、背が高く、ひととき優雅な女性で、見たところ二十五歳ほどであった。

彼女はシッター達の間を歩き回りながら会話をし、その美しく形作られた手を皆に見せていた。その指は異常なほど長く、先に向かって細くなっていた。

彼女は男性のシッターの一人(D 氏)の前で立ち止まった。そして、その瞬間の彼の考えをはっきりと読み取ったに違いない様子で、彼に金の印章指輪を貸してほしいと頼んだ。

後になって D 氏は認めたが、その晩自分の目を見たあらゆる出来事にもかかわらず、彼はなお半ば、男性の感応者が椅子から抜け出し、巧妙に女性の存在者を演じているのではないかと疑っていたのである。

D 氏はかなり苦勞して小指から指輪を外した。

すると彼女は両手を差し出し、他の十五人のシッター達が見守る前で、その指輪を試してみせた。

彼女は、その指輪を八本の指のそれぞれにはもちろんのこと、両方の親指にも、いとも簡単に通してみせたのである。

その後、D 氏は指輪をベストのポケットへしまった。

そして実験が終了した後、私たちは彼を囲みながら、その指輪を感応者の手にはめてみる実験を行った。

しかし彼は、感応者の左右どちらの手の指にも、その指輪を第二関節より先へ通すことがまったくできなかった。

また、両方の親指については、そもそも指輪をはめることさえ全くできなかったのである。

****実験第 6 号****

場所——ロンドン心理学協会。感応者 C、男性、年齢約五十歳。

この感応者は、私が 27 ページで言及した人物である。すなわち、シッター達が作るサークルの外に離れて座ることを拒み、シッター達の中に座ることを主張した人物である。そして実験中ずっと、二人のシッター達が彼の両手をそれぞれ自分の手でしっかりと握っていた。

彼はトランス状態には入らず、実験中ずっと完全に正常な意識を保っていた。そして物質化した姿が現れると、その姿に宿っている存在者に向かって話しかけ、その存在者は明瞭な声で返答した。

その声は、部屋の中にいた十四人ないし十六人のシッター達だけでなく、部屋の外の扉のところに配

置されていた二人の観察者にもはっきりと聞こえていた。

その観察者たちがその場で作成した記録は、実験中に私たちの誰一人として幻覚を見ていたのではないことを決定的に証明するものであった。

私が今述べている機会には、オルガン奏者が病気のため欠席していた。そのため足踏みオルガン(ハーモニウム)は閉じられたままとなっていた。

そしてシッター達は、その楽器から二十フィートほど離れた場所にサークルを作った。その中に感応者は座り、その晩彼の監督を任されていた二人の役員——協会の会長と副会長——によってしっかりと保持されていた。

およそ十分後、一人の背が高く細身の男性が私たちの中に現れた。

そして、その存在者はシッター達が作るサークルを、不思議なことにその間を通り抜けたのか、あるいはその上を越えたのか分からないまま通過し、ゆっくりとハーモニウムのところまで歩いて行った。

彼は蓋を持ち上げて後ろへ押しやり、それから演奏用の椅子に腰を下ろした。

さらにいくつかのストップを引き出すと、両手を使い、また両足でペダルを操作しているように見えながら、その楽器で六つほどの完全に調和した和音を演奏した。

その音楽は、部屋の中にいた十四人のシッター達だけでなく、部屋の外に配置されていた二人の観察者にもはっきりと聞こえた。

しかも実験中ずっと、感応者は演奏用椅子に座っていた存在者からおよそ二十フィート近く離れた場所で、しっかりと保持されていたのである。

それから三十分後、存在者の一人が、

「少し音楽があると条件がより良くなるでしょう」

と提案した。

そこで私は席を立ち、ハーモニウムのところへ行き、自発的に演奏を始めようとしていた。

すると、約二十フィート離れた場所にいた感応者が、

「どうか後ろをご覧ください」

と言った。

私は振り返った。

すると、ほとんど私に触れそうなほど近くに、先ほどと同じ背が高く細身の男性の姿が立っていた。

私はその顔を注意深く見つめた。そして直ちに、その顔立ちが感応者のものとは明らかに異なる型であることに気づいた。また、その身長も感応者よりほぼ三インチ(約七・五センチ)高かった。

彼はこう言った。

「ご友人よ、あなたの親切なご協力に感謝します。
この楽器から発せられる振動は、こうした繊細な実験の最中において、私たちに非常に大きな助けを与えてくれるのです。」

****実験第 7 号****

場所——ロンドン、ホワイトホール南西地区。感応者 D、男性、年齢約三十四歳。

ここでは T 氏および W 氏と呼ぶことにする二人の若い男性がいた。彼らは私のロンドンの家で、この感応者と共に何度も実験を行ったことがあった。

ある時、彼らは感応者に対し、自分たちの「事務所」にある晩来てもらい、そこで何らかの結果が得られるかどうか試してみたいと申し出た。

感応者は直ちにその申し出を受け入れた。そして彼らは親切にも、私もその友人たちの集まりに加わるよう招待してくれた。

今日では、その二人の若者は国家の中枢において高い地位に就いている。しかし当時の彼らは、自分たちが政府や政府機関と何らかの関係を持っていることを決して外部に漏らしていなかった。そして彼らが「事務所」と呼んでいたことから、私たちは皆、彼らがロンドンで何らかの商業活動に従事しているものと思っていた。

彼らは私に住所を教え、そこへ感応者を連れて来るよう頼んだ。

私は感応者と共に馬車でその住所へ向かった。そしてそこが、ロンドンの賑やかな大通りであるホワ

イトホールから延びる狭い通りであることに気づいた。

馬車を止めると、私は非常に驚いた。というのも、私たちが到着した場所は、どう見ても巨大な建物の側面入口と思われたからである。そしてその建物の正面は明らかにホワイトホールに面していた。

私が感応者に何か言う暇もなく、あるいはその建物について私が目にしたことに注意を向けさせる暇もなく、T 氏と W 氏は階段を急いで降りて来て私たちを迎えた。

そして彼らは私たちを見事な玄関ホールへ案内し、さらに宮殿のような大階段を上がらせた後、非常に広く天井の高い部屋へと導いた。

その部屋は美しく装飾されており、豪華な調度品で整えられていた。重厚な書き物机、大型の椅子や長椅子が置かれ、それらは深紅色の革張りであった。また床には厚い絨毯が敷かれており、歩くたびに靴が心地よく沈み込んだ。

二人の女性が、見事な彫刻の施された暖炉のそばで私たちを待っていた。

そしてその時になって、他には誰も招待していないことを知らされた。

そこで私たちは扉を閉めて鍵をかけ、その壮麗な部屋の一隅で感応者を囲むように席に着き、結果を待った。

しかし、この場合もまた、実験のための特別な準備はほとんど、あるいは全く行われていなかった。

私は、その場所や調度品の豪華さにもかかわらず、このような不利な条件のもとでは、どのような結果も得られないのではないかと彼らに話した。

感応者はほどなくして深いトランス状態へ入った。

そして私たちが席に着いてから十五分も経たないうちに、一人の背の高い高齢の男性の姿が現れた。

その人物は歩く際に少し前かがみになっていた。

彼は T 氏と W 氏のほうへ向かって進んだ。

すると二人は即座にその人物を認識した。

また、その場にいた二人の女性も同様に彼を認識した。

しかし彼らは誰一人として名前を口にしなかったため、私はその存在者がおそらく彼らの親族か、あるいは個人的な友人なのだろうと考えた。

彼は彼らの前におよそ二分間立っていたが、突然向きを変え、私が座っていた場所からわずか十八インチ(約四十五センチ)ほどのところまで歩み寄って来た。

私は一目見て彼が誰であるか分かり、

「おや、これは 1881 年によくお見かけした____卿
ではありませんか」

と言った。

すると彼はすぐに軽く頭を下げ、実に親しげな様子で私に微笑みかけた。しかし、彼の唇がはっきりと動いているのは見えたものの、何を言ったのかは聞き取れなかった。

最初に声を上げたのは T 氏であった。

彼は言った。

「これは驚くべきことを超えています。私たちが今座っているこの場所は、ロンドンの_____であり、ここは____卿ご自身の部屋なのです。

私たちは、あなたにも感応者にも選んだ場所を知らせずに、試験としてここで実験を行うことに決めました。

なぜなら、____卿がこれほど愛していたこの部屋——彼の最も偉大な外交上の成功の数々が実現したこの部屋——へ本当に戻って来ることが可能なのかどうかを確かめたかったからです。」

そして彼らは、その時になって初めて、自分たち二人が政府の公務に従事していることを私に明かした。

その後、さらに二、三人の存在者が現れた。

また、私は後ほど触れることになるインド産の小さな野生動物も物質化した。

私は、その動物を出現させないでほしい、少なくともこのような宮殿のような部屋ではきちんと制御してほしいと存在者たちに懇願した。

しかし存在者たちは、それは自分たちには不可能であると主張した。

するとその小動物は部屋の中へ駆け込み、私たちの最も近くにあった豪華な書き物机によじ登った。

そして机の上を猛烈な勢いで走り回り、公文書やペンや鉛筆を四方八方へ散らかしてしまったのである。

政府の建物の中で、しかもその建物の中でも最も神聖な部屋の一つにおいて、私たちがそのような騒動を引き起こしたにもかかわらず、どうして私たち全員がタワー・ヒルの処刑台送りにもならず、終身刑にも処されずに済んだのか——その理由は、今日に至るまでなお私には解くことのできない謎のままである。

実験第 8 号

場所——ロンドン南西部ウィルトン・クレセント。感応者 D、男性、年齢約三十四歳。

この男性の感応者は部屋の隅に座っており、その周囲を取り囲むシッター達の輪によって身動きできないほどしっかりと囲まれていた。シッター第 1 番の人物は、感応者から三フィート(約九十センチ)も離れていなかった。

その時、一人の女性の存在者が現れた。

彼女はすぐにシッター達の間へ歩いて行き、五分以上にわたって彼らと立ったまま話をしていた。

彼女が感応者から約八フィート(約二・四メートル)離れた場所にいた時、感応者が座っていた木製の

椅子の脚の一本が突然折れた。そして感応者は前方へ倒れ込み、たまたまシッター第 1 番であり、彼に最も近かった私の腕の中へ崩れ落ちた。

彼は深いトランス状態にあり、荒い呼吸をしながら、かすかにうめいていた。

私たちの予想に反して、その存在者はシッター達ほど驚いてはいなかった。彼女が最初に気にかけたのは感応者のことであつた。

彼女は事故の瞬間に立っていた場所から全く動かず、私たちが応急的に椅子を支え直し、意識を失った感応者を再び座席に座らせると、ゆっくりと彼の方へ歩み寄った。

そしてその後、彼女はしばしばそうしていたように
非物質化した。見たところ、床を通り抜けるようにし
て消えていったのである。

これは実験の中でも常に興味深い場面であり、観
察する価値のあるものであった。

まず足と足首が消える。

次に脚がゆっくりと腰の高さまで下方へ沈んでい
く。

続いて身体が首のところまで沈む。

その後、別れの言葉を二、三語残したのち、顔も消
えていく。

最後には頭頂部だけが床の表面に約三十秒間残るのである。

存在者が現れている間、頭を包んでいたまばゆいほど白い衣が、暗色の絨毯の上にはっきりと見えていた。

この非物質化の過程は、最初から最後までおよそ一分十五秒ほど続いた。そして人工照明の下で、その場にいた全員が毎回はっきりと観察することができたのである。

実験第 9 号

場所——ロンドン南西部イートン・スクエア。感応者 D、男性、年齢約三十四歳。

この感応者との実験では、ときおり獣や鳥の物質化も現れた。

その中でも最大であり、また最も驚くべきものであったのはアザラシの物質化であった。それはある時、陸軍元帥ウォルズリー卿が出席していた際に現れたのである。

このような現象が初めて起きたのは、イートン・スクエアにある個人住宅でのことであった。

感応者はそれまで一度もその家に入ったことがなく、家の主人も当時の彼にとっては全く見知らぬ人物であった。

実験会の最中、私たちは突然、奇妙な声が大きな声量で何やら馬鹿げた言葉を叫び、その最後に甲高い口笛を鳴らすのを聞いた。

すると家の女主人が言った。

「まあ、あれはうちの昔のオウムに違いありません。この部屋で何年も暮らしていて、いつもまさにあの言葉を繰り返していたのですから。」

これに対して、その場にシッター達として出席していた彼女の娘と、女主人の家庭教師も直ちに同意し、その証言を裏付けた。

これが獣や鳥の物質化というものについて私が初めて耳にした機会であったため、正直に言えば、その瞬間の私はまったく当惑してしまった。

しかし、存在者の一人がそのことについて私たちに説明してくれた。そしてその晩以後、私たちは時折、いわゆる「下等動物」と不適切に呼ばれている生き物たちの物質化を目撃するようになった。

科学者たちも一般の批評家たちも、私たちの研究がこの段階に達するまでは、私たちを単なる幻覚にとらわれた変人呼ばわりしていた(ちょうど彼らがサー・ウィリアム・クルックスをそう呼んだのと同じように)。

ところが今度は、彼らはさらに大胆になり、私たちはアナニアとサツピラの子孫(すなわち悪質な嘘つ

き)であるか、あるいは三月ウサギのように狂っているのだと断言するようになった。

しかし、これから記録する次の実験の結果は、そのような批判に最終的な決着をつけるものであった。なぜなら私は、自分の主張が真実であることを、多くの批判者志望の人々に対して実際に目で見せて証明することができたからである。

インド産の小さな野生動物——これから述べる機会に出席していたある女性がかつて飼っていた愛玩動物であり、その動物は三年以上前に「死んで」いた。また感応者はその動物を見たことも聞いたこともなく、その存在を知っていたのは他にはシッター達のうち一人だけであった——が、突然、深いトランス状態に入り荒い呼吸をしている感応者の座っている場所から飛び出して来た。

その小さな生き物は、生前に喜びを表す合図としていつも発していたのと全く同じ鳴き声を上げていた。

存在者たちは私たちに対し、その姿を見ても驚かないようにと言った。というのも、その動物は生前と同じ状態を身につけて現れるのであり、まったく害はないからであるというのであった。

その動物は、全部でおよそ十回ほど姿を現した。

毎回、部屋にいる時間は二分を超えることはなく、現れた時と同じように突然姿を消した。

しかし、この時は事情が異なった。

その動物を生前飼っていた女性が、その愛称で呼びかけたのである。

するとその動物は、ゆっくりと彼女の膝の上によじ登った。

そして約三十秒ほど静かにそこに留まっていた。

その後、戻ろうとしたのであるが、その際に、その女性のスカートを覆っていたレースに片脚が引っ掛かってしまった。

その動物は激しくもがいた。

そして最後には自力で抜け出すことができたが、その時にはレースをおよそ三インチ(約七・五センチ)も破いてしまっていたことが、後になって判明した。

実験が終了すると、その場に出席していた医師の A・C 博士が、全員に席を立たないよう求め、自ら破れたレースを注意深く調べた。

その結果、彼は次のように報告した。

破れたレースには五本の緑色の毛が引っ掛かっており、それらは明らかに、その小動物がもがいている最中に脚から抜け落ちたものと思われる、というのである。

すると、その女性は直ちに、その毛の色と質感が間違いなくその動物のものであると確認した。

そして、その場にいたもう一人のシッターもこれを裏付けた。

その人物は博物学者であり、その動物が生きていた頃に何度も見たり触れたりした経験を持っていたのである。

その五本の毛は注意深く回収され、薄紙に包まれた後、光を通さず湿気も防ぐ箱の中に保管された。

それらはロンドンの数人の科学者やその他の研究者たちに見せられた。

しかし数日後、それらの毛は次第に小さくなり始め、ついには完全に消えてしまった。

私たちは、その原因は、研究者たちが調査のために観察していた際に、日光やガス灯から放射される化学作用を持つ光線(アクチニック・レイ)の影響を受けたためであろうと考えている。

そして、私たちを嘲笑していた批判者たちの冷笑に最終的な決着をつけたのは、まさにこの五本の小さな緑色の毛であった。

また、存在者たちは時折、自分たちが物質化した身体を使用する際にほぼ例外なく身にまとっている衣服の一部を、はさみで切り取ることを許可してくれることがあった。

そして、その布片を適切な箱に注意深く保管し、さらに化学作用を持たない光の下でのみ観察するならば、それをしばらくの間保存しておくことが可能であることが分かった。

しかし、その箱を金庫の中に保管して鍵を掛けておいたにもかかわらず、その物質は常に少しずつ縮小していき、最後には完全に消滅してしまった。

そのため私は、そのような物質について科学的な
検査を行うことは、これまで一度も実現できなかった
のではないかと考えている。

実験第 10 号

場所——ロンドンにある私の家。感応者 B、女性、
年齢約四十九歳。

この実験の結果は、少なくとも私個人に関する限り、私が得たあらゆる検証の中で最も驚異的であり、同時に最も説得力のあるものであった。

私は自宅の部屋で、厳選されたシッター達と共に実験を行っていた（感応者はサー・ウィリアム・クルックスの感応者であった）。

その時、例のフランス人の踊り子の女性が、頭から足先まで完全に物質化した状態で立っていた。

彼女は私からわずか六フィート（約一・八メートル）ほどのところにおり、感応者からは三フィートから

四フィート(約一～一・二メートル)ほど離れた位置にいた。そして、ちょうどガス灯のブラケットの正面に立っていた。

ガス灯の炎は最大まで明るくされていたが、その光は黄色い紙でわずかに覆われていた。これはガス灯の直接の光線を多少和らげてから彼女に当てるためであった。

もしそうしなければ、彼女の顔立ちはたちまち溶け始め、流れ落ちてしまうのである。まるで柔らかい蠟が熱によって溶けるのと全く同じようにである。

そして、その光景は私自身の経験から言っても、見るに耐えないほど痛々しく、不快なものであった。

彼女は五分ほど私たちと話をしていた。

そして、いつものように自分の手や腕、足や脚を私たちに見せていた。彼女はそれらの美しい造形を非常に誇りに思っているようであった。

すると彼女は私の方を向き、

「席を立て、私のそばへ来てください」

と言った。

私はその通りにした。

すると彼女はすぐに私のすぐ近くまで歩み寄り、その小さな頭を私の右肩の上にもたせかけた。

私はその時、彼女の顔立ちが地上の同年代の普通の若い女性に比べるとやや小さいように見えることに気づいた。

しかしその一方で、彼女は感応者よりかなり背が高かった。

感応者は当時、五十歳近い、やや背の低いふくよかな女性であり、すでに成人した二人の娘の母親であった。

また、彼女の肌は非常に美しい白い色をしていた。

それに対して感応者の肌は非常に色が濃かった。

髪の色も、それぞれの肌の色調に対応していた。

さらに彼女の耳にはピアスの穴がなかったが、感応者は常にイヤリングを身につけていた。

こうした点によって、私は存在者と感応者が全く別個の存在であることを確信した。

しかし、それでも私は満足しなかった。

そして、この研究に七年間を捧げた期間の中で、ただ一度だけ、私は実験の条件を破ってしまった。

というのも、この重大な問題に最終的な決着をつけたいという思いが、あまりにも強く私を支配してしまったからである。

私はごく静かに右腕を伸ばし、その存在者の身体を完全に抱きかかえるように回した。

すると私は、若い女性の細い腰を抱いていることに気づいた。

その腰は、全身を覆っている白い衣の上から触れても、温かく、しかもしっかりとした感触を持っていた。

その腰囲は、どう見ても十五インチから十六インチ（約三十八～四十一センチ）を超えるものではなかった。

それに対して、その夜の感応者の腰囲は二十四インチ（約六十一センチ）であった。

こうして私は、自分にとって最後の決定的な検証を得たのである。

それはあまりにも完全で、あまりにも説得力のある検証であったため、私は二度と別の検証を求めようとは思わなかった。

その後も私はさらに数年間にわたって研究を続け、さらに五人の感応者とも実験を行った。

しかし、どの存在者も私にこれほど決定的な検証を与えることはなかった。

そして私自身も、もはや別の検証を求める必要はないと考えていたのである。

しかし、その記念すべき夜は、まだ決して終わりではなかった。

というのも、私がこれほど意図的に実験条件を破ったにもかかわらず、その存在者は怒りを見せるところか、私が彼女をしっかりと抱きしめていた三十秒以上のあいだ、ただシッター達に向かって微笑んでいただけだったからである。

そして、私が腕をほどくまでは、自分の頭を私の肩から離そうとさえしなかった。

私は彼女を解放すると、自分のしたことを謝罪し、これほど素晴らしい検証を与えてくれたことに感謝を述べてから、自分の席へ戻った。

すると彼女は、ある女性に自分のそばへ来て立つよう求めた。

しかも、その女性として選ばれたのは、それまでもっと、この特定の感応者を詐欺師だと考えていることを率直に認めていた人物であった。

その女性は席を立ち、存在者のすぐそばへ立った。

すると存在者は直ちにその女性の肩に頭をもたせかけ、さらに女性がその少女の腰に腕を回すことを許した。

二人が並んだ姿は実に魅力的な光景であった。

その女性は当世風の夜会服を着ており、一方、存在者の少女らしい姿は、まばゆいほど白く流れるような衣に包まれていた。

二人はそのまま一分近く立っていた。

その時、私たちは存在者が女性に向かって、

「頭を回して、感応者が座っている場所をご覧なさい」

と言うのを聞いた。

感応者は深いトランス状態にあり、その場所はわずかに四フィート(約一・二メートル)ほどしか離れていなかった。

女性は言われた通りにした。

そして彼女は、感応者の姿がはっきり見えると述べた。

感応者は頭を胸に垂れ、腕と手を身体の両脇にだらりと下げていた。

また、その身体は黒いビロードの衣服に包まれていた。

というのも、彼女は私たちとの実験の際には必ず黒いドレスを着ることを主張していたばかりでな

く、下着までもすべて黒いものを身につけていたからである。

さらに、トランス状態に入る直前には、自分のポケットハンカチさえ私たちに預けていた。

それは誰からも、

「白い衣をまとった物質化存在を装っているのではないか」

という非難を受けないためであった。

サー・ウィリアム・クルックスは、この感応者フローリー・クック——後にコーナー夫人となる女性——と結婚する以前に、一連の実験を行っている。

また彼女は、数年間にわたりロンドンにあるサー・ウィリアム・クルックス夫妻の家に住んでいたと私は記憶している。

言うまでもなく、彼が行った実験は、世界的に著名な科学者である彼が考え得る限り、最も厳格な検証条件の下で常に実施された。

そして、サー・ウィリアム・クルックスのもとで受けたその優れた訓練のおかげで、彼女は結婚後ずっと後になってからも、私たちとの実験において、強い光の下でこのような驚くべき物質化現象を生み出すことができたのである。

しかも彼女は、資格を持つ医師による衣服や身体の徹底的な検査にも、自ら進んで応じていた。

彼女は検証を嫌がるどころか、私たちが彼女を通じて検証を得ようと努力していることを、いつも喜んでいた。

そして、私たちが実際に有力な検証を得ることに成功した時には、その幸運を聞いて誰よりも心から喜んでくれたのが、まさにコーナー夫人自身であった。

彼女の思い出に、あらゆる敬意が払われるべきである。

サー・ウィリアム・クルックスが彼女で行った実験において、「ケイティ」と名乗る存在者は、彼に対して、自分が常に身にまとい現れる白い衣の一部を切り取ることを許可しただけでなく、自分の頭髮から長い髪の毛の束を切り取ることで許可した。

さらに彼女は、彼が自分を腕に抱き、その物質化した身体について科学的な検査を行うことまでも許したのである。

彼は新聞紙上で次のように書いている。

「最近私は、電灯によって照らされた状態のケイティを見る機会を数多く得た。そのため、以前の論文で述べたケイティと感応者との相違点に、さらにいくつかの点を付け加えることができる。

私は、身体という点に関する限り、感応者とケイティが二人の別個の人物であることについて、最も絶対的な確信を持っている。

昨夜、ケイティの首は露出していた。その皮膚は見た目にも触れた感じにも完全になめらかであった。

一方、感応者の首には大きな水ぶくれがあり、同じ条件下ではそれがはっきりと見え、触るとざらついている。

ケイティの肌色は非常に白いが、感応者の肌色は非常に黒い。

昨夜、ケイティは裸足で、しかも背伸びをしているのではなく、ごく普通に立った状態で、感応者より四インチ半(約十一・四センチ)も背が高かった。

感応者の髪は非常に濃い茶色で、ほとんど黒く見えるほどである。

一方、今私の目の前にあるケイティの髪の束——彼女が豊かな髪から切り取ることを許してくれたものであり、私はまずその髪が本当に頭皮から生え

ていることを確認するため根元までたどって調べた——は、美しい黄金がかった赤褐色である。」

また彼は別の公表された報告書の中で、ある時ケイティの脈拍を測定したことについて述べている。

その脈拍は一分間に七十五回で、安定して打っていた。

一方、感応者の脈拍を測定したところ、通常通り一分間に九十回であった。

彼はまた耳をケイティの胸に当てた。

すると内部で心臓が規則正しく鼓動しているのが聞こえた。

しかも、その鼓動は感応者の心臓よりもさらに規則正しく脈打っていた。

彼はケイティの肺についても調べた。

その結果、当時ひどい咳のため医師の治療を受けていた感応者の肺よりも、ケイティの肺の方が健康であることが分かった。

ある時、ケイティは完全に物質化した姿で、ほぼ二時間にわたって部屋の中を歩き回り、その場にいたシッター達と親しげに会話を続けた。

そして彼女はサー・ウィリアム・クルックスを自分のもとへ呼び寄せた。

彼女は彼の腕を取り、腕を組んだまま二人で部屋の中を歩き回った。

その時彼が受けた印象は、自分が別の界層から来た存在者ではなく、生きている女性をエスコートしているというものであった。

それほどまでに、その物質化は完全なものであった。

彼によれば、自分が受けた最大の検証は次のようなものであった。

ケイティは彼に対し、他のシッター達から離れ、自分と一緒に、深いトランス状態にある感応者が横たわっている場所まで来るよう求めた。

彼がそこへ行くと、感応者は床の上にうずくまっていた。

彼女は実験開始時と同じ黒いビロードの衣服を身につけており、見たところ完全に意識を失っているようであった。

彼は周囲を見回した。

するとケイティが感応者のすぐそばに立っているのが見えた。

彼女はいつものように、流れるような白い衣をまとっていた。

そこで彼は感応者の両手を握った。

そして膝をつきながら、ケイティを注意深く調べた。

それは、自分の目の前にいるものが本当にケイティであり、幻影でも幻覚でもないことを確かめるためであった。

その検査のあいだ、ケイティは言葉を発しなかった。

ただ静かに頭を動かし、微笑んでいるだけであった。

彼は、自分の目の前で床にうずくまっている感応者を、三度にわたって注意深く、そして批判的な目で調べた。

それは、自分が握っている手が本当に生きている女性の手であることを確かめるためであった。

そして同じく三度にわたって、彼はケイティの方も調べた。

彼自身が非常に適切に表現しているように、「揺るぎない注意深さをもって」観察したのである。

そしてついに、彼はケイティの客観的実在性について、すなわち、自分のそばに立っている彼女が実際に存在していることについて、全く疑いを持たなくなった。

やがて感応者がわずかに身動きした。

するとケイティは即座に、そこから離れるよう彼に合図した。

彼は感応者から少し離れた場所へ移動した。

その瞬間から、彼にはケイティの姿が見えなくなった。

しかし彼は感応者が目を覚ますまで、その場を離れようとはしなかった。

このようにして、サー・ウィリアム・クルックスは、存在者と感応者の双方に、三度にわたって同時に触れたのである。

彼は細かな点に至るまで極めて慎重な人物であった。

そのため、この検証の際には速記のできる友人を自分のすぐそばに配置し、自分が検証中にその場で述べたことを、一語一句そのまま記録できるよう手配していたほどであった。

彼はケイティと感応者を一緒に撮影しただけではない。

さらに許可を得たうえで、物質化した存在者を自らの腕に抱きしめた。

そして私自身が経験したのと同じように、自分が抱いている存在が、感応者その人と同じほど確かな実体を持つ存在であることを確認したのである。

彼はその後、British Association の会長として、全世界に向かって大胆に次のように宣言した。

それらの実験から二十五年以上が経過した今に至っても、この問題について自分が発表した見解の中で、後年の経験によって撤回したいものや修正したいものは一つもない、と。

また彼は、Royal Society の会長として、今日では科学界の偉大な指導者の一人と見なされている。

しかもそれは、彼が長年にわたって受け続けた迫害にもかかわらず得られた地位であった。

その迫害は、物質化した身体をまとったこれらの存在者の実在が証明されたという自らの率直な見解を公表したために受けたものである。

しかも、その迫害を加えた人々については、

「彼らはクルックスの靴ひもを解く資格すらない人々であった」

とさえ評されているのである。

彼が到達した高い地位は、彼が観察者としていかに明晰かつ正確であったかを十分に保証している。

また、科学的研究者としての広範な経験、判断力の確かさをも保証している。

そして何よりも、それは彼の人格の誠実さを保証している。

この種の問題においては、その誠実さこそが最も重要な要素なのである。

私がここに記録したような確固たる事実を前にして、私や私の研究を助けてくれた人々が、サー・ウィリアム・クルックスや Alfred Russel Wallace

教授、その他の第一級の科学者たちの証言に支えられながら、

「私たちは別の界層から来た存在者たちを実際に見ただけでなく、実際に触れもした」

と断言するのは、少しでも不思議なことであろうか。

その存在者たちは、一時的に物質化した身体をまとい、その身体によって、

目で見、

耳で聞き、

唇を使って話し、

また歌いさえしたのである。

それは、あなたや私、あるいは他のどの正常な人間にもできることと全く同じであった。

もし私が、これらの別の界層の存在者たちが私たちの研究対象として示してくれたあらゆる現象の中で最も驚異的なこの現象について、七年間にわたる批判的調査によって得た結果をなおも沈黙したままにしておくならば、それは私にとって卑怯極まりない行為であろう。

そして私は、何が起ころうとも、もはや沈黙を守るつもりはない。

私は、このようなことを公表した場合にどのような結果が待っているかを十分承知している。

というのも、サー・ウィリアム・クルックスが物質化現象の実験結果を公表する勇気を示した時、科学者たちも一般の批評家たちも、彼に対して何冊分にもなるほどの罵倒を浴びせたからである。

そして私は、ここに述べた事実を信じることのできない人々の中にも、同じように偏狭で、些末なことに執着し、揚げ足取りばかりする精神が必ず存在すると少しも疑っていない。

しかし、私がここで述べた事実は、徹底的に証明された事実である。

どのような議論も、

どのような詭弁も、

どのような歪曲も、

それらを髪の毛一本分たりとも動かすことはできないのである。

科学者たちが、別の界層の存在者たちが一時的な身体をまとい、一定の明確な条件のもとで活動するという考えを嘲笑するならば、それは単に幼稚で意図的な無知をさらけ出しているにすぎない。

そして彼らが、自ら進んでこれらの問題を調査し、

存在者たちが自らの住む界層での生活について語ることに耳を傾ける努力をするまでは、

この問題について軽率な判断を下す資格はない。

ましてや、その判断によって他人を傷つけるような非難を行う資格はなおさらない。

なぜなら、その研究を進めてきた人々は、科学者たちほど多くの資格を持たなかったかもしれないが、

真実に到達したいという願いにおいては決して劣っておらず、

しかも、自ら進んでその調査を怠ってきた人々に代わって、

研究に必要な費用と労力を喜んで引き受けてきた人々だからである。

****催眠術****

新聞その他の場所で、私たちは実験中に全員が催眠術にかけられていたのではないか、という主張がしばしばなされてきた。

この主張に対する答えは、集団催眠というものは、決定的に不可能であることが証明されている、ということである。

私自身の経験では、同じ人々に対して絶えず練習を重ねた場合に限り、十二人の優れた被験者のうち、せいぜい三人から五人程度に対して支配的な催眠作用を及ぼすことができる。

しかし私たちの場合、十六人のシッター達は実質的に実験のたびに入れ替わっていた。

したがって、同時に催眠状態へ導くことができたとしても、一人か二人が限界であり、それ以上は不可能であったはずである。

また、このような繊細な実験に関しては、いかなる形であれ催眠術の使用は厳しく禁止されるべきである。

そして、感応者が自発的に真のトランス状態へ入ることを認める代わりに、実験会の開始時に意図的に感応者を催眠状態へ導くことは、結果という観点から見れば、まさに失敗を招こうとしているようなものである。

このことは近年、フランスやドイツにおいて決定的に証明されている。

そこでは、物質化現象のために感応者を催眠睡眠状態へ導いた際、感応者から現れた姿が、多くの場合、その地方の新聞の最新号に掲載されていた挿絵や写真と非常によく似ていたのである。

しかも、それらの挿絵や写真は、催眠術をかけた者、あるいは実験者たち、もしくはその双方によって事前に見られており、その場にいた人々の脳や心に強い印象を残していたものであった。

そのため、より経験を積んだ研究者たちは、ただちにその問題の原因を見抜くのであるが、経験不足のために完全な当惑状態に陥っていた大多数の人々は、その結果を、全く無実である感応者の不正行為によるものだと判断してしまったのである。

第Ⅳ章

さまざまな存在者による質問への回答

- * 界層
- * 物質の霊化
- * 霊・魂・身体
- * 「死」と呼ばれる変化
- * 動物
- * 部分的物質化
- * 地上との絆をゆるめること
- * 偽りの現象

**** 界層 ****

質問

私たちは、あなた方が「界層(Spheres)」という言葉を使うのをよく耳にします。

それについて何か教えていただけますか。

例えば、その数はいくつあるのか。

どこに存在しているのか。

また、あなた方は自由に一つの界層から別の界層へ移動できるのか。

****回答****

その正確な数については私にもお答えできません。

しかし、あなたの質問の他の部分については、できる限り説明してみましよう。

この種の事柄をあなた方に説明することは、私たちにとって非常に困難です。

その理由は、地上の言語には大きな制約があるからです。

そのため私たちは、説明を分かりやすくするために、用語や例えを用いなければなりません。

その結果、私たちが本来望むほど完全でも正確でもない説明になってしまうことがあります。

さて、あなたの質問に答えましょう。

あなた方のような地上の人々にとっては、地上の人生の後に続く「七つの活動的生命の界層」を知っておけば十分です。

あなた方もご存じのように、地球は球形です。

したがって、この七つの界層を、地球を取り囲むようにして、次第に大きく広がる同心円状に配置されているものとして想像することができます。

私が今さら地球が球形であることを思い出させても、どうか笑わないでください。

というのも、あなた方は忘れていないはずだからです。

約五百年前までは、あなた方の聖典の誤った教えの結果として、すべてのキリスト教徒とユダヤ教徒、さらには科学者たちまでもが、地球は平らであると固く信じていました。

そして地球が球形であると教える者は、皆「死」をもって罰せられたのです。

地球に最も近い動的エネルギーの界層を、あなた方は第一界層と呼ぶことができます。

そしてここが、大多数の人々が地上の肉体を離れた後に引き寄せられる界層です。

彼らはそこで、「活動的生命の界層」における進歩の人生——あるいは、その反対の人生——を開始するのです。

しかし、地上のあらゆる誤った信条や教義の束縛を完全に振り捨てた人々。

霊的知識への自由で開かれた道を着実に進みつつある人々。

私たちが「悟った者たち」と呼ぶあなた方は、ここでの人生をそのように生きるよう努めるべきです。

すなわち、最後に地上の肉体を離れる時には、第一界層に留まることなく、ただちにそこを通過し、

第二界層において目を開くことができるようにです。

その際には、地上から移行する過程で、望ましくない地上的な状態をすべて永久に後に残していくことになるでしょう。

ですから、地上であなた方に残されているわずかな年月のあいだ、このことを目標として生きなさい。

私たちの世界には、固定され不変の法則があります。

それは、私たちは皆、自分が現在住んでいる界層より下の界層へ——あなた方の言い方を借りれば「下方へ」——自由に行くことができるという法則です。

そして、それを望む時にはいつでもそうすることができます。

ちょうど私が今夜、あなた方に会うためにこちらへ来たようにです。

しかし、あなた方の言うところの「上方」、すなわち自分より上位の界層へは、どの存在者も行くことができません。

それぞれの存在者にとって、その時が到来するまでは不可能なのです。

私たちはしばしば、あなた方が詩人の言葉として

「死というものは存在しない」

という言葉を用いるのを耳にします。

あなた方が地上の人生の終わりに起こる変化——
あなた方が「死」と呼んでいる変化——について抱
いている考え方に関する限り、その言葉は完全に
正しいものです。

ちなみに、その変化は、あなた方の地上の人生の
始まりに起こる変化、すなわちあなた方が「誕生」と
呼ぶ変化と本質的に同じものです。

しかし、「死」というものは、あなた方がその言葉
を用いる意味においては、あなた方の界層にも私た
ちの界層にも存在しません、それに類似したこと
は私たちの界層でも起こります。

それは、より高い界層へ移行する時が到来した時
です。

なぜなら、その変化を通過した後に目を開くと、私たちは自分が以前いた界層よりもはるかに壮大な界層にいることに気づくからです。

そして、それまで住んでいた界層がどれほど美しく、どれほど完全なものに思っていたとしても、それとは比較にならないほど素晴らしい界層なのであります。

そして私たちの理解によれば、このことは永遠の時代を通じて続いていきます。

それぞれの存在者は、自らの属する界層において成長し続けます。

そして、その界層での訓練期間が完了すると、直ちにその上の界層へ移行します。

このようにして、存在者は絶えず上方へ向かって進歩し続けるのです。

先ほども述べたように、私たちは自分より下位の界層へはいつでも戻ることができます。

しかし、自分より上位の界層へは、その定められた時が来るまでは決して行くことができません。

このことについては、Through the Mists という本の中に見事に描かれています。

この書物は、私たちの仲間の一人が、Robert James Lees の脳と手を通して、地上の人々に与えたものなのです。

**** 物質の霊化 ****

質問

私たちの実験で使用される物質化した身体が、どのように形成されるのか説明していただけますか。

回答

人間、動物、植物の外被、すなわちそれぞれの中に宿る生命霊の身体を構成する諸要素は、大気中に溶け込んだ状態で存在しています。

そして、それを支配する法則についての知識を用いれば、自然界に存在する無数の形態のいずれであっても、瞬時に構築することが可能です。

したがって、条件さえ適しているならば、あなた方の目の前に象を物質化させることも、人間を物質化させることも、私たちにとっては同じくらい容易なことなのです。

過去に起こった多くの、いわゆる「奇跡」——たとえば、あなた方の聖典(聖書)に記録されているような出来事——が可能であったのも、この法則についての知識があったからです。

そして今日においても、多くの、いわゆる「奇跡」が可能であるのは同じ理由によります。

この知識は、私たちの界層にいる化学の達人たちによって保持されています。

彼らは、物質の霊化の実験において指導者として活動しています。

ここで言うのは、あなた方が呼ぶところの「霊の物質化」ではありません。

実際には、それとは全く異なるものだからです。

感応者は、物質化した身体を構成する要素を引き出すための、もう一つの供給源にすぎません。

なぜなら、大気の状態が常に化学的に好都合であるとは限らないからです。

時には条件が不適切であるため、大気と感応者の双方から要素を集めても、身体を構築するのに十分な材料を集めることが絶対に不可能な場合があります。

そのような場合でも、もし何らかの姿があなた方の前に現れるならば、その現象はもはや物質化ではなく、変容現象となります。

私たちが変容現象という言葉で意味するのは、感応者が変容させられるということです。

それはちょうど、彫刻家が新しい材料から新しい像を作る代わりに、既存の彫像をノミで加工して別の姿に変えるようなものです。

変容現象においては、感応者の顔は支配している存在者によって完全に換えられ、その存在者自身の顔を一時的に表すようになります。

その後、無意識状態にある感応者は椅子から立ち上がられ、シッター達の間を歩き回ります。

そして一人ひとりの前で立ち止まり、変化した顔立ちを見せるのです。

その際には、あなた方もご存じのように、「スレート」と呼ばれる大きな厚紙が用いられます。

それらは事前に発光塗料で塗られており、その光によって顔が見えるようになっています。

なぜなら、物質化の代わりとして変容現象が起こる場合、それは通常、完全な暗闇の中でのみ生じるからです。

したがって変容現象においては、感応者の顔が用いられます。

その顔は、まるで一度溶かされて別の型に流し込まれたかのように、その形や顔立ちが変化します。

そして、その変化した顔によって、別の存在者の姿が表現されるのです。

これは、しばしば誤って物質化現象と混同されますが、その現象自体は物質化と同様に正当で誠実な現象です。

したがって、あなた方の実験会に参加するすべての人々は、これら二つの現象の違いについて、あらかじめ十分な説明を受けておくべきです。

また、なぜ私たちの界層において実験を指導している者たちが、あなた方が期待している物質化現象の代わりに、時として変容現象を起こさざるを得ないのかについても、事前に十分理解しておくべきなのです。

物質の霊化は、ある一定の自然法則によって支配されています。

そして、そのような法則はすべての自然法則と同じく不変です。

すなわち、絶対に変わることがありません。

真の研究者の仕事とは、それらの法則がどのように働いているのかを発見し、その法則に従って研究を進めることにあります。

あなた方が何かを「奇跡」と呼ぶ時、そこには、

「自分たちはすべての自然法則を知っている」

という前提が含まれています。

そして、自分にはどうしても説明できない出来事が起こると、あなた方は、その一見不可能に思えることが、どのような——あなた方にとっては未知の——自然法則によって可能になったのかを探ろうとする代わりに、

「これはあらゆる自然法則を超えたものである。したがって『奇跡』である」

と安易に言うてしまうのです。

しかし、それは愚かな態度です。

本来ならば、その現象を可能にしている新たな自然法則を発見しようと努めるべきなのです。

**** 霊・魂・身体 ****

質問(G.B.による)

キリスト教の聖書にある『コリント人への第一の手紙』第十五章には、「霊的な身体(spiritual body)」について書かれています。

これについて説明していただけますか。

回答

「人よ——女よ——汝自身を知れ。」

人は今も、そして永遠の時代を通じて、**霊(Spirit)そのものである**。

そして人は今も、また墓の彼方における人生の一定期間にわたっても、**魂(Soul)、すなわち霊的身体(spiritual-body)を持っている。**

さらに人は、地上での人生のあいだは、**物質的身体、肉体、あるいは地上の身体**を持っている。

そしてその身体は、あなた方が「死」と呼ぶ変化の時に、永久に地上へ残していくのである。

あなたが言及したその手紙の中で、筆者は、あなた方の界層における最も偉大な三位一体について論じている。

すなわち、

****プシュケー(Psyche)****

****プネウマ(Pneuma)****

****ソーマ(Soma)****

である。

これは、

****霊(Spirit)****

****魂(Soul)****

****身体(Body)****

を意味している。

そして、それらは地上界における生命を構成する

****「三つにして一つのもの」****

なのである。

なぜなら、生命の存在するところには必ず霊が存在するからである。

そして霊が存在するところには、地上の人生が続く限り、また界層においても一定期間のあいだは、魂（霊的身体）も存在する。

さらに、地上界において霊が存在するところには、必ず物質的身体も存在する。

しかし、その身体は、その身体の「死」の時に永久に残されるのである。

あなたは、その章の第三十五節で、筆者がしばしば問われる次の質問に言及していることを覚えているだろう。

- > 「死人はどのようによみがえるのか。
- > また、どのような身体をもって来るのか。」

これに対して彼は次のように答えている。

- > 「愚かな者よ。
- > あなたが地に蒔く種は、まず死ななければ生命を与えられない。
- >
- > そして、あなたが蒔くものは、後に現れる身体そのものではなく、ただの種粒にすぎない。
- >
- > それは小麦かもしれないし、他の穀物かもしれない。
- >
- > しかし神は御心のままにそれに身体を与え、すべての種にそれぞれ固有の身体を与えられる。」

一見取るに足らない小さな小麦の粒は地中へ蒔かれる。

その種は、自らの身体を永久に地中へ残す。

しかし、その小さな種の中に宿っていた霊、すなわち生命は、地中から立派で美しい茎となって立ち上がり、豊かな穂を実らせるのである。

そして彼は続けてこう述べている。

>「死人の復活もまた同様である。」

地上の身体、すなわち自然の身体は朽ちるものとして蒔かれる。

しかし霊的身体(魂)は朽ちないものとして起こされる。

自然の身体は辱めのうちに蒔かれる。

しかし霊的身体(魂)は栄光のうちに起こされる。

自然の身体は弱さのうちに蒔かれる。

しかし霊的身体(魂)は力のうちに起こされる。

この点をよく注意してほしい。

- > 「蒔かれるのは自然の身体であり、
- > 起こされるのは霊的身体である。
- >
- > 自然の身体が存在し、
- > また霊的身体も存在するのである。」

それにもかかわらず、このような教えを前にしながら、キリスト教はなおも地上の肉体そのものの復活を宣言するのである。

****——別の存在者による回答**。**

あなた方も私たちも、今も、そして永遠に、不滅の霊なのです。

そしてあなた方は、霊的進化の一部として、訓練と修養の期間を過ごすために地上を訪れています。

この期間中、あなた方は地上の身体、すなわち肉体と、霊的身体(魂)とをまとった霊なのです。

したがって、すでに述べたように、あなた方一人ひとり、それ自体の中において完全な

****「三位一体の統一体」****

なのです。

なぜなら、あなた方は今この瞬間、

****霊(Spirit)****

****霊的身体(Soul)****

****地上の身体(Physical Body)****

によって構成されているからです。

そして、あなた方が「誕生」と呼ぶ変化——すなわち地上での人生の始まり——において、霊は霊的身体をまとい、さらに地上の身体を発達させました。

それと同様に、あなた方が「死」と呼ぶ変化——すなわち地上での人生の終わり——においては、霊

は依然として霊的身体をまとったまま、地上の身体から抜け出します。

そして、その地上の身体は永久に残されます。

その後、長い時代を通じて一つの界層からさらに上位の界層へと進んでいくにつれて、霊はその都度、自らの霊的身体の一部を少しずつ脱ぎ捨てていきます。

そして最終的には、純粹な霊のみとなって、

神——すなわち霊そのものである存在——のもとへ帰っていくのです。

霊が界層において進歩するにつれて、その霊的身体の本質を構成している、より微細な神経流体もまた、ますます精妙なものと変化していきます。

したがって、物質の影響力は、霊の進歩に正比例して減少していくことになります。

言い換えれば、霊的身体は次第に粗雑さを失い、ますます霊的なものとなっていくのです。

それは、その内部にいる霊が進歩するにつれて起こることなのです。

——別の存在者による回答。

本当の**あなた自身**は、通常の人間の視覚にはまったく見えません。

その本来のあなたは、今この瞬間、二つの別々で明確に異なる外被、あるいは身体の内部に存在しています。

一つは通常の視覚に見える身体です。

それが物質的身体、あるいは地上の身体であり、その脳によって制御されています。

もう一つは通常の視覚には見えませんが、透視能力による視覚にははっきり見える身体です。

それが霊的身体であり、脳の霊的複製体によって制御されています。

そして、その霊的複製体こそが精神(mind)なのです。

最近、ある心霊研究雑誌に非常に適切な説明が掲載されていました。

私はそこへ少しだけ補足を加えたいと思います。

その説明は次のようなものでした。

「霊的身体は、より微細なエーテルによって構成されている。

そして、それは精神（意識）を持っている。

この精神は、脳から独立した存在であり、その関係は霊的身体と地上の身体との関係と同じである。

ただし、それらは別の界層の住人なのである。

そしてあなたは、この精神を備えた微細な身体を、肉体から抜け出させることができる。

また死後においても、その姿は生前と全く同じである。」

「この霊的身体は、あなたが微小な父親の生殖細胞(精子)と母親の卵子によって形成され始めた瞬間に、その歩みを開始した。

それはあなたと同じように、まさしくその両者の子孫なのである。

それはあなた以前には存在していなかった。

したがって、それはあなたの霊のように、自存的な存在でも、不滅の存在でもあり得ない。

それはあなたと同じように自然な始まりを持った。

ゆえに、通常の観点から見れば、それにも終わりがなければならない(そして最終的には実際に終わる)。

しかし、その消滅は地上の身体の死と同時に起こらない。

霊的身体は肉体の死を生き延びるのである。」

そして、あなたが霊として界層を上昇していくにつれて、その霊的身体は次第に少なくなり、薄れていくのである。

多くの人々は、あなた方が誕生するときには、自分たちの神から直接——あるいは、キリスト教徒の言い方をすれば「天国」から地上へ来るのだと考えているようです。そして死ぬときには、地上で送った人生に応じて、自分たちの神のもとへ直接戻る—

—あるいは、キリスト教徒の言い方をすれば「天国」または「地獄」へ行くのだと考えています。

しかし、「天国」や「地獄」とは、あなた方の上や下や周囲にある場所ではないことを、私は改めて思い出していただきたいのです。それらは、あなた方の地上生活における状態や条件であり、また、界層におけるあなた方や私たちの生活における状態や条件でもあります。そして、あなた方も私たちも、それぞれの属する界層でどのような生き方をするかによって、自らの「天国」あるいは「地獄」を作り出しているのです。

あなた方はいずれ、人間の霊が「天国」から直接地上へ来たのではなく、この世界に到達するまでに多くの惑星や世界で生きてきたことを知るようになるでしょう。そして同じように、地上での訓練期間が

終わった後には、多くの界層で生活することになるのです。

無数の世界が宇宙空間に満ちあふれており、そのうちのある数の世界において、まだ初歩的な状態にあるそれぞれの霊は、「地球」と呼ばれるこの小さな惑星へ到達する前に、その巡礼の旅の一部を果たします。そして、この世界の役割は、霊に自己意識と善悪の知識を授けることにあります。

地上にいる間だけ、霊は男または女となります。それ以前には、その長大な旅路のあらゆる段階において、霊はただの胚のような存在にすぎませんでした。それは一時的な物質の形態であり、ここで少し、あちらで少しと経験を積み重ねながら成長していく存在でした。その中には、高次の霊の種子の一部が閉じ込められており、その種子は、さなぎから

蝶が現れるように、初歩的な形態と初歩的な機能の中で輝きを放っています。

そして常に前進し続け、新しい生へ、新しい死へと向かい、生きては死に、伸び上がり、上方へと手を伸ばし、惑星における生命の道筋に沿って前進し続けるのです。

ついに、その存在が初めて物質の身体に包まれたものであることに気づいて目覚める日がやって来ます。すなわち、「地上生活」と呼ばれる短い期間のあいだ、肉と血を持つ存在——男あるいは女——として自らを見いだすのです。

このようにして、霊が物質の身体、すなわち地上の身体の中において誕生した後——（霊は魂、あるいは霊的身体に包まれています）——それは自らの個性、自らの情熱、自らの愛、そして善悪につ

いての知識を獲得します。自己意識を得るのです。そしてこれらを成し遂げることによって、物質世界における巡礼と変容の旅路を永遠に終えることになるのです。

地上の身体が死ぬと、霊は(なお霊的身体をまとものまま)、ただちに私たちの界層、すなわち霊の王国における新たな巡礼と存在の系列へと引き寄せられます。そしてここから、霊のさらなる浄化と成長が始まるのです。

その霊は、地上生活で得た経験によって、自らを知ることから得られた崇高な愛と英知の特質に満たされているか、あるいは地上生活のあいだに、自らが征服され、支配されることを許してしまった動物的な低い性質に満たされているかのいずれかで
す。

それゆえ、私たちが地上の男女であるあなた方に対して繰り返し警告していることは、きわめて重要なのです。すなわち、あなた方が最後に肉体を離れた後も地上に引き留めようとするような絆、とりわけ動物的な欲望に基づく絆を緩めなさい、ということです。

****質問****(別のシッター A. D. による質問)

あなたは「あなたが最後に地上の肉体を離れるとき」と言いました。では、私たちは地上で生きている間にも、自分の肉体を離れることがあるのでしょうか。

****回答****(ある医師の霊による回答)

はい、絶えず離れています。というのも、実際にはあなたの人生のほぼ毎晩、本当のあなた——すなわち霊である A. D.——そして正常な男女は皆、肉体が十分な休息を取った後、その夜の一部の時

間を地上の肉体のすぐ外で過ごしているからです。おおよそ二時間半から三時間半ほどで、その長さは、その日肉体と脳が行った仕事の量や、その仕事が精神的なものであったか肉体的なものであったかによって異なります。

このため、人間は年齢に関係なく、決して突然眠りから起こされるべきではありません。なぜなら、その衝撃は霊と肉体の双方にとって実に非常に激しいものだからです。私の考えでは、特に危険なのは真夜中から午前四時頃までの時間帯です。

あなた方の中の「悟った人々」、すなわち霊的な事柄において真の進歩を遂げた人々は、しばしば、自分たちが霊として完全に意識を保ったまま、目の前の寝台に横たわり、健全な眠りに包まれている無意識の地上の肉体の傍らに立っていた間に見聞きしたことを思い出すことができます。

このような人々が睡眠中に殺されたり、焼死したりするような害を受ける危険はほとんどありません。なぜなら、肉体の外に立つ霊が歩哨の役割を果たしているからです。そして危険の最初の兆候を察知すると、その霊は穏やかでありながら素早く肉体の中へ戻り、その肉体を無感覚の状態から即座に行動できる状態へと目覚めさせるのです。

一方で、寝る直前に消化しにくい食べ物で胃を満たしたり、アルコールを大量に飲んだりする男女は、その重い昏睡状態のために、霊が肉体から離脱することがほとんど不可能になります。彼らの場合、その昏睡状態が自然な睡眠の代わりとなっているのです。

そして、夜の間を負傷したり命を失ったりするのは、まさにこうした人々です。その理由は単純で

す。食べ過ぎや飲み過ぎで膨れ上がった肉体の中に閉じ込められた哀れな霊は、眠っている間に彼らを守る歩哨としての役目を果たせなくなっているからです。

私には、地上の白色人種の男女の大半は、自らの霊的本性——地上で果たすべき本来の使命——を発達させようと努力する代わりに、自分の歯で自分の墓穴を掘ろうとしているように思えます。なぜなら、食事はあなた方の地上生活において、現在あなた方が考えている以上にはるかに重要な役割を果たしているからです。

私たち霊界の界層にいて、あなた方が科学的な主題と呼ぶものに関心を持っている者たちにとっては、あなた方人間が自分自身の肉体についていかに無知であるかということは、実に驚くべきことです。

「人よ——男よ、女よ——汝自身を知れ」

これは、すべての人が真剣に心に刻むべき言葉なのです。

あと数分もすれば、私は自分の属する界層へ戻る
ことになります。そして、その後、もし地球の人々
について何も知らない科学者に出会い、私がつい先
ほど、自分たちを高い教育を受けた者だと思っ
ている男女のもとを離れてきたのだが、彼らは脾臓
のような、自分の身体の中にある器官についてさ
え、ほとんど、あるいは全く知識を持っていなかつ
た、と話したならば、その科学者は呆然として驚き
の目で私を見ることでしょう。

さらに私が、その地上の外科医や医師たちは、太
陽神経叢や松果体といった極めて重要な器官につ

いてほとんど、あるいは全く知識を持たず、脳と精神との違いについても理解しておらず、人間の極性については全く何も知らず、そのうえ正常な人間は皆、両方の鼻孔で同時に呼吸していると固く信じているのだ、と話したならば、その科学者はそのような科学者たちの状態を、狂気に近いものとみなすことでしょう。

****質問****(A. C. 医師による質問)

私たちが太陽神経叢や松果体についてほとんど何も知らず、人間の極性については全く知らないという点については認めます。また、正常な人間の呼吸についてのあなたの説明は、私にとって全く初めて聞くものです。これらの事柄について、何か説明していただけますか。

****回答****

あなた方の極性は、およそ二時間ごとに、陽性から陰性へ、あるいは陰性から陽性へと変化します。そして呼吸もそれに伴って変化します。

「誕生」の瞬間から「死」の瞬間まで、正常な人間は誰でも、一度に一方の鼻孔だけで呼吸しています。そしてそれが約二時間続き、その後、呼吸は反対側の鼻孔へ移り、再び約二時間続きます。

両方の鼻孔を同時に通って呼吸する唯一の時は、その極性と呼吸が切り替わる瞬間だけです。

ある時点において、どちらの鼻孔で呼吸しているかを見ることで、その時その人のどちら側が陽性になっているかが分かります。

あなた自身で、この小さな実験を試してみなさい。手のひらに向かって息を吐いてみるのです。そして二時間後にもう一度試してみなさい。鼻孔に詰まりなどの障害がなければ、あなたはすぐに、私が話したことが真実であることを認めざるを得なくなるでしょう。

あなた方はまだその事実を理解していませんが、強大な磁気の波が、地球の北極と南極の間を絶えず流れ続けています。

また、強力なアストラルの流れが赤道の帯域に沿って地球を巡っており、北半球側の流れは東から西へ、南半球側の流れは西から東へ向かっています。

そして、それらのアストラルの流れから、さらに別の流れが両極へ向かって下降しており、それが磁針

の極性や、その伏角（磁針が水平から傾く現象）を生み出しているのです。

もしあなた方が賢明であるならば、寝室の配置を工夫し、ベッドに横たわるときには、常に自分の身体がこの強大な磁気の波の流れる方向に沿うようにすべきです。すなわち、当然のことながら、顔とベッドの足元が北と南を向くようにするのです。

もしそれが不可能であれば南向きでも構いません。しかし、決して東向きや西向きにはしてはいけません。

あなた方が子供たちを東向きや西向きに寝かせ、この強大な磁気の波に真っ向から逆らう姿勢を無理に取らせたとき、夜の中に彼らがどれほど落ち着きを失うかを観察してみなさい。

そして、眠っている間に何度も何度も身体の向きを変えようとする様子を見てみなさい。

なぜなら、その子供たちの中にいる霊は、あなた方の愚かさを十分に理解しているからです。

そのため彼らは、あなた方が置いた東西方向ではなく、磁気の波に正対できるように、北と南の方向へ身体を向けようとするのです。つまり、その波に逆らうのではなく、それに沿った向きで横たわろうとするのです。

病院や療養所、病室などでこの実験を試してみなさい。

そうすれば、どれほど良い結果がもたらされるかが分かるでしょう。

なぜなら、私たちの界層ではよく知られていることですが、健康な人でさえ、常にこの強大な磁気の波に逆らう向きで眠ることによって深刻な影響を受けるのですから、子供や病人の場合、その影響がどれほど大きいかは想像に難くありません。

そして、子供に見られる脊柱湾曲症の多くの例は、これらの事実についてあなた方が無知であるために生じているものであり、その原因をたどればここに行き着く場合が少なくないのです。

私たちはしばしば、あなた方の中の「悟っていない人々」が次のように語るのを聞いて微笑みます。

「不思議じゃないか！ 重要な用事があるときは、前もってそのことを強く意識しておけば、たいてい自分が望む時間に目を覚ますことができるんだ。

ほとんど一分の狂いもなく起きられる。私にはまるで奇跡のように思えるよ。」

しかし、それは「奇跡」などではなく、その話し手が知らなかった自然法則が働いただけのことです。

実際に起こったことは、眠りにつく前に、肉体の「脳」が、その人の霊の持つ霊的な「精神」に対して、ある時刻に目覚めることが重要であるという事実を刻み込んだというだけのことです。

そして、その時刻になると、健全な眠りに包まれた肉体の外に立っている霊が、自らの「精神」を通してその事実を認識し、静かに肉体へ戻ります。

すると「精神」は直ちに「脳」に作用し、眠っていた人は目を覚まします。

そしてかなり驚きながら、

「どうしてまたこんな奇跡が起こったのだろう」

と不思議がるのです。

しかし、その人は、それが単に自然法則がごく正常に働いた結果に過ぎないことには、まったく思い至りません。

もう一度繰り返します。

「人よ——男よ、女よ——汝自身を知れ。」

**** 「死」と呼ばれる変化 ****

質問

あなた方の霊たちは、かつて地上での人生を経験したことがあると仮定するならば、私たちの言うところの「死」を経験したはずですよ。この変化に関するあなた方自身の体験について、何か話していただけますか。

回答

その変化を実際に通過した者として、私はその出来事について多くを語るができます。すなわち、(1)実際に肉体を離れることについて、そして(2)肉体から解放された直後の霊の状態についてです。

しかし私は、(1)の肉体を離れる過程については、まず地上の科学者に語ってもらうことにしたいと思

います。彼は私たちの提案に従い、厳密に科学的な方法でこの問題を調査し、その結果として死の床の光景を観察した人物です。

そして私は、あなた方の中の「悟った人々」の何人かが、自らこの実験を試みる気になることを期待して、その記録を紹介したいのです。なぜなら、それは確かにあなた方にとって驚くべき啓示となるからです。

その後で私は、(2)の問題、すなわち解放された霊が界層での新しい生命に目覚めた直後の状態について、自分自身の考えを少し付け加えましょう。

さて、もしあなた方がまだ透視能力を発達させていないのであれば、それを発達させるための努力をしなければなりません。あるいは、これから紹介する報告を残した科学者たちが見事に成功したよう

に、人工的な方法によってそれを引き出さなければなりません。

さらに、特別な写真撮影装置による実験も始めなさい。そうすれば、この種の研究において極めて貴重な証人となる記録を得ることができるでしょう。

では、その人工的に引き出された透視能力によって、あなた方は何を見るのでしょうか。

また、特別に準備された写真レンズは何を記録するのでしょうか。

その二人の科学者のうちの一人に、彼自身の言葉で語ってもらいましょう。

「あなた方が繰り返し主張していたように、肉体の死の瞬間に霊が飛び立つのを見ることができると
いう言葉を思い出し、私は、以前の盲目的な無知の
状態に満足していることができなかった。かつて
の私は、何度も自分は多くを知っていると公言して
いたのである。

やがて、その機会が訪れた。照明その他の条件が
整った環境のもとで、並外れて高い霊性を備えた
一人の男性が、大多数の人々の後を追うべく召さ
れようとしていたのである。

私は時間が過ぎていくのを見守った。そして、つい
に彼が呼吸を止めようとする瞬間が訪れた。

突然、彼の身体に震えが走り、その時が来たことを
告げた。

『今だ。』

私は私を手伝っていた友人にささやいた。

私たちは黒い布の下へ頭を差し入れた。

すると、薄い紫色の蒸気の柱が見えた。それは柔らかな雲のように集まり、どうやら肉体の上と周囲に形成されているように見えた。

粒子は、まるで分子同士の引力に導かれるかのように、次々と互いに引き寄せられていった。

そしてついには、ある物体の輪郭がはっきりと識別できるようになった。

その姿は次第に明瞭さを増していった。

それは人間の蒸気状の姿のように見え、急速に、より完全な形を取り始めた。

そして先ほどまでの紫色の色調は消え去り、最も完全な水晶のように純粹で無色透明な姿へと変化していった。」

「その瞬間、恐ろしいほどの静寂が訪れた。言葉では到底表現できない感覚が、私たち二人を包み込んだ。まるで心臓が止まってしまったかのように感じられたのである。私たちの感情を言葉で表現したり説明したりすることは、まったく不可能である。

私たちはガラス越しに見える光景へ視線を凝らし続けた。そして粒子が次々に集まり、私たちが生前よく知っていたその男性の整った姿を形作っていた。

その姿は、肉体からおよそ一フィート(約三十センチ)ほど上に浮かんでいた。そして、細い一本の紐のようなもので亡骸の胸と繋がれ、まるでそこに係留されているかのように見えた。

その顔は確かに私たちが知っていたその男性の顔であった。しかし、その表情は生前よりもはるかに穏やかで美しかった。目は閉じられており、その新しい姿は眠っているように見えた。

すると何らかの衝動によって、私の友人も私も、まるで同時に、その人が目を覚ましてくれればよいのにと願った。

その時、その姿を肉体に繋ぎ止めていた紐が切れた。

美しいその姿に穏やかな震えが走った。その身体
のあらゆる部分は完全な型として形作られていた。

紫色の炎のような光が心臓のあたりから放射され
ていた。そして、その穏やかな顔には優しい表情が
浮かんでいた。

私たちの知る限り、彼は利己心なく人生を送り、私
たちと共にいた頃も非の打ちどころのない人物で
あった。

そして、その美しい内なる生命が外なる姿と結びつ
くにつれて、その完全な型は完全な人間となった。

やがて彼は立ち上がる姿勢を取った。

そして、静かに横たわる地上の肉体に向かって、悲
しげな一瞥を投げた。

まるで、

『さらば、汝という狭き家よ！ 私はもはやお前を必要としない。』

と語るかのように、その肉体へ向かって手を差し伸べた。

その後、自らの力を小さな球体の中へ集めると、永遠の明日へと続く陽光の中へ消え去っていった。」

「私たちは確信し、そして知っている。私たちの友人は今も生きていることを。彼は不滅であり、永遠に生き続ける存在であることを。

そして、私たちはこの発見に関する報告を締めくくりにあたり、次のように述べたい。

私たち二人は、この体験によってまったく別人になった。

私たちにとって、この人生も、この世界も、あの経験以来まったく違って見えるのである。」

.....

私は心から願っています。この地球という惑星において、これら二人の科学者が得た成果が、あなた方の中の何人かをして、自らこの実験を試みようという気持ちにさせることを。

そして私は、そう遠くない将来において、あなた方が「死」と呼んでいる変化の際に、霊が霊的身体をまとったまま地上の肉体から離れていく様子を写し

た写真が、ごくありふれたものになることを期待しています。

そうなれば、たとえ最も貧しい人であっても、この方法によって、

「死とは永遠の生命への門にすぎない」

という事実について、疑いようのない確かな証拠を得ることができるでしょう。

さて、この興味深い主題について、私自身の言葉を少し付け加えさせていただきます。

私は、この二人の科学者が非常に見事に述べた内容を全面的に支持します。

なぜなら、私たち自身の観察によっても、霊は霊的身体に包まれた状態で、地上の肉体からゆっくりと離脱していくことが確認されているからです。

そして、その霊を肉体に繋ぎ留めている紐の最終的な切断は、医師によって「死亡」が宣告された後、かなり長い時間が経過してから初めて起こるのです。

二つの身体が完全に分離した直後の最初の数分間において、「悟っていない人」の霊は、通常、その状況をはっきりと理解していません。

その人は、自分が「死んだ」とは信じません。

なぜなら、自分自身が完全に生きていると感じているからです。

彼は自分の肉体を目の前に見ます。

そして、それが自分のものであることも理解しています。

しかし、自分がその肉体から最終的に分離したのだということは理解できません。

そして、その分離した霊の霊的成長の程度に応じて、ある者はこのような迷いと決断のつかない状態を続け、またある者は感覚の麻痺した無意識状態を続けます。

その状態は、今や空になった殻——すなわち地上の肉体——と、霊的身体をまとった霊との間に、ほんのわずかでも繋がりが残っている限り続くのです。

時として、その人の中に「死にたくない」という非常に強く激しい願望が存在していた場合、霊的身体をまとった霊は、埋葬の後に再び戻ってきて、亡骸の上部付近に留まることがあります。

そして、その状態のまま何日も、何週間も、何か月も、さらには何年も留まり続けることがあり、ついには地上の肉体が完全に土へ還るまで離れないことさえあります。

これこそが、あなた方の埋葬地でしばしば目撃される「墓場の幽霊」と呼ばれる現象の説明です。

すなわち、霊的身体をまとったままの霊が、さまざまな理由によって朽ちゆく地上の肉体から離れることができず、その肉体に縛られた状態になっているのです。

このため、古代ギリシャ人や、過去の高度に発達した文明を持つ他の民族は、「死」の後に火葬されることを、あらゆる特権の中でも特に大きな特権であると考えていました。

そして私たちも、そのような彼らの理にかなった願いを支持します。

私たちは、あなた方に対し、すべての遺体を火葬することを勧めます。

とりわけ、殺人者や自殺者の遺体については、なおさらそうすべきです。

そうすることによって、肉体に縛られた霊を、その地上の肉体が墓の中でゆっくりと腐敗していく様子を見続けなければならない苦悩——いや、それ

以上に恐怖——から解放する助けとなるからです。

地上の肉体に対するこの消えることのない生命への渴望は、「悟っていない人々」が「死」の後にも持ち続ける大きな力です。

そしてそれは非常に強力な創造力を持っているため、本来ならばより高い界層へ進むべき霊を、しばしば再び地上生活との接触へ引き戻してしまいます。

ですから、あなた方は霊的知識を増すよう努めなさい。

そして地上生活の間に霊界の美しさを確かめなさい。

そうすれば、あなた方が旅立つ時が来たとき、創造的な力と力能があなた方を迎え入れ、あなた方を外衣である地上の肉体から引き離し、ただちに前方へ、上方へ、進歩の界層へと運び去ってくれるでしょう。

ここに、「死」という問題に関して現代人が犯している最大の誤りの一つがあります。

ある人にその時が訪れ、霊が地上の肉体を離れようとしているとき、親族や友人たちは、盲目的無知と残酷な無理解によって、その人の寢床の周囲に集まります。

そして涙を流し、祈りを捧げることによって、旅立ようとしている霊を再び地上へ呼び戻そうとします。

ちょうどその霊が、自由を得ようとして檻の中で羽ばたく小鳥のような状態にある、その瞬間にです。

そして、この自然法則に対する無知のために、多くの愛する人々の霊は、墓の周囲を何か月もの間さまようことを余儀なくされてきました。

彼らは、自らの地上の肉体を構成していた粒子がゆっくりと分解されることによって解放されるのを待ちながら、そこに留まり続けるのです。

ですから、私はもう一度繰り返します。

「死」の瞬間に、あなた方の涙や祈りによって、その霊が地上の肉体を離れないように仕向けてはなりません。

そのようなことをすれば、霊を地上に縛りつけてしまふことになるからです。

そして、「死」の後には、すべての遺体を火葬しなさい。

そうすることによって、霊が自由を得るのを助けてあげなさい。

**** ANIMALS(動物たち) ****

質問(G. B. による)

あなた方のような存在が私たちに示してくれる現象を研究してきた結果として、私は「奇跡的な」とか「超自然的な」といった種類の言葉を、次第に信じなくなりました。しかし正直に言って、私たちの実験中に獣や鳥が現れるということには、非常に驚かされました。これは、いったいどうして可能なのでしょうか。

回答(ある科学者の霊による)

あなたが観察した事例の場合、それは一部には、博物学者としてのあなたがあらゆる種類の動物の生命に深い関心を抱いていたことによるものでした。しかし、それ以上に大きな理由は、あなた方のもとに現れた動物たちが、地上にいるかつての飼い主たちに対して、今なお深い愛情を抱いていた

からです。そして、その飼い主たちが、たまたまあなたと同じ時に、私たちとの実験に参加していたのです。そうした幸運な組み合わせが、彼らをあなたの方のもとへ引き寄せたのでした。

たとえば、そのオウムは、私たちが実験を行っていた家の女主人に深くなついていましたし、その娘の一人にも深い愛情を抱いていました。その二人とも、そのオウムが生前の長い年月を過ごしたまさにその部屋に居合わせていました——そして、あなたもそこにいたのです。これが、その幸運な組み合わせでした。

インドから来た小さな野生動物も、同じように、かつての女主人を深く慕っていました。そして、ご存じのように、その動物は今でも絶えず彼女の前に現れています。ただし、それはいつもあなたがその場にいる時だけです。これもまた、幸運な組み合わせ

せなのです。愛は、彼らにとっても私たちにとっても、あらゆる困難を克服する力なのです。

しかし、彼らがどのようにして、その一時的な身体を作るための材料を手に入れているのかについては、私には理解できません。その一時的な身体は、彼らが地上にいた時に用いていた身体を、驚くほど正確に再現したものなのです。実際、あなたも見たように、その小さな動物が地上で生きていた時に身体を覆っていた毛の色や質感までもが、その一時的な身体の上に寸分違わず再現されているのです。

****質問(G. B. による)****

あなたは、一時的な身体をまとっている動物たちは、あなた方の支配をまったく受けないと言われました。これは、どういうことなのでしょう。

****回答****

彼らの行動は、完全に私たちとは独立しています。

私たちが、あなた方のもとに物質化して現れたいと望む人間の霊たちのために、忙しく実験を進めているその最中に、動物たちは、私たちには理解できない何らかの方法で部屋の中へ入って来ます。そして、それを私たちは防ぐことができません。

さらに彼らは、どこからともなく、一時的な身体を作り上げるのに十分な物質を手に入れます。そして、自分たちの好きな時に現れ、思いのままに部屋の中を歩き回り、自分たちの都合のよい時に姿を消

します。そして、その時が来るまでは決して消えませんが。

私たちには、これを防ぐ力がないのです。少なくとも、私たちが観察した事例において見られたように、彼らとそのかつての飼い主との間に存在する愛情の絆が、それほどまでに強いものである限りは、私たちにはそれを阻止する力はありません。

****質問(別のシッターによる)****

しかし、まさかあなたは、地上に最初の動物の生命が現れて以来、存在してきた何十億、何兆という数え切れないほどの動物たちが、死後も生き続けていると言うつもりではないでしょうね。そんな膨大な数の動物たちが住むための場所など、どうして界層に存在し得るのでしょうか。

****回答****

友よ、あなたが「永遠とは何か」を私に説明してくれるなら、私は「空間とは何か」というあなたの質問に答えましょう。

亡くなった動物——特に、地上で生きていた間に愛情を受け、また愛情を育まれて亡くなった動物——は、その霊的身体をまとして、動物たちの住む界層へと移ります。その霊的身体は、その動物が地上において最も完全な状態にあった時の肉体の正確な対応体であり、その脳の霊的対応体、すなわち心も備えています。

そして彼らは、その界層において、幸福で満ち足りた生活を送ります。そこでは、人間による虐待を恐れる必要もありませんし、他の動物による襲撃を恐れる必要もありません。なぜなら、彼らの中にあつた生来の殺戮への衝動も、そのような殺戮を必要

とする事情そのものも、「死」とともに永遠に取り除かれているからです。

そこでは、博物学者は、地上にいた時には彼を大いに悩ませた、あらゆる種類の動物の生命に関する数多くの問題を解き明かすことができます。

そこでは、あなた方の古代の著述家の一人が語ったように、

「狼と子羊は共に伏し、豹と子山羊は共に横たわる」

のです。

なぜなら、その界層では、自然界に見られる残酷で恐ろしい仕組みでさえ、彼らに触れることができないからです。

そこでは、地上で生きていた間、人間の手によって言葉では言い表せないほどの苦しみを受けた哀れな生き物も、完全な平安と安息を見いだします。

そしてまた、かつて長年にわたって忠実な友であった存在——それが獣であれ鳥であれ——は、愛する主人や女主人を迎えるために、必ずそこで待っていることでしょう。そして、この上ない喜びをもって彼らを歓迎するのです。

なぜなら、その世界では、**愛こそが王だからです**。

****質問****

あなたは先ほど「自然界の悪魔的な残酷さ」という表現を使われました。たとえば、人間の幼い子ども

を創造した創造主が、その一方で、その子どもを引き裂き殺すためのヒョウを創造したとは、私にはどうしても考えられません。

****回答****

あなたはいずれ、創造者は一人ではなく、多く存在したということを学ぶでしょう。

この事実は、あなた方の聖典の中にも言及されています。そこでは神々が、

「われわれのかたちに、われわれに似せて、人を造ろう」

と語っています。

**** 部分物質化と全身物質化 ****

私たちは、実験中に「力(パワー)」を節約し、また感応者(Sensitive)の身体から過度に生命力が失われるのを防ぐために、全身物質化はまれであり、大部分は部分的な物質化にとどまるということを、霊たちが一般に認めているのを知っています。

これらは次のように分類することができます。

- (1)額、目、鼻だけが現れるもの。発声能力はない。
- (2)顔全体は現れるが、後頭部は存在しないもの。発声能力はない。
- (3)頭部と首まで現れ、発声器官も完全に備わっているもの。

(4)頭部、首、肩、腕および手まで現れるが、それ以上は存在しないもの。

(これは最も一般的な形態の一つである。)

(5)頭部と身体が腰のところまで完全に現れるもの。

(6)頭部、身体、さらに脚と足まで完全に現れるもの。

(これは最もまれな形態である。)

何度かの機会に、私たちの会員の招待客として実験会に参加した部外者たちが、そのように示された厚意を裏切り、私たちが薄暗い照明の中で実験を行っていて、彼らの行動が見えないのをよいことに、「条件を破る」行為に及びました。

そのような者たちのうち、少なくとも半ダースほどの男性が、後になって次のように告白しています。

物質化した姿が自分の正面に現れ、その距離が二、三フィートほどしかなく、しかも感応者からは二～三ヤードほど離れた位置に立っていた時、彼らはその霊の下半身に触れて確かめようとして、自分の脚や足を伸ばし、その姿が見えている場所を横切るように動かしたのです。

しかし、どの場合にも、彼らは自分の脚や足の動きを妨げるものがまったくなかったと報告しています。そして、そのことに大いに当惑し、驚いたのです。

言い換えれば、彼らは、自分たちの目の前に見えていた物質化した身体の上半身には、触れることの

できる下半身がまったく付いていなかったことを発見したのです。

これは、その物質化が部分的なものであって、全身物質化ではなかったことを決定的に証明するものでした。

ロンドン南西部のバタシー・ライズ(Battersea Rise)で開かれたある実験会では、参加者は男性のみであり、また、Sir William Crookes の感応者であった Mrs. Corner が、私たちのための感応者を務めていました。

その席では、「フランス人の少女」¹ が、ほぼ三十分にわたって私たちの中央に立ち続けていました。そして、その場で半円形に座っていたシッター達——その中には医師やその他の科学者たちも含まれ

ていました——から次々に質問を受け、それに答えていました。

その時に出された質問のうち、二つの例外を除いては、ここで公表するには適切ではない内容のものでした。

****質問****(A. C. 医師による)

あなたの外見、そして腕や手や胸部のしっかりした感触から判断すると、あなたは今この瞬間、完全に物質化しているように思われます。その事実を私たちに納得させるために、下肢を見せていただけませんか。

****回答****

いいえ、先生、今はそれができません。しかし、私が「フローリー」(感応者)のところへ戻る時間を二

分ほどいただけるなら、もっと多くの「力(パワー)」を得ることができます。そうすれば、喜んでお見せいたしましょう。

彼女は、深いトランス状態で椅子に座っていた感応者のところへ戻りました。そして二分もしないうちに、再び私たちの前へ歩いて現れ、白い衣を持ち上げて、膝から下の脚を私たちに見せました。

それから彼女は、その小さな足の一方を A. C. 医師の膝の上に乗せ、彼に自分の脚と足の両方に触れることを許しました。それによって、自分があらゆる点において完全に物質化していることを、彼と私たち全員に証明しようとしたのです。

****質問****(A. C. 医師による)

三分前にはあなたには下肢がなく、それを得るためには感応者のところへ戻らなければなりませんでした。それはなぜなのですか。

****回答****

先生、私たちがこのような方法で地上の皆さんのもとへ来る時、私たちの最大の願いは、まず声によって認識され、その次に顔によって認識されることなのです。

そのため、多くの者たちは、頭部、喉、腕、手、そして身体の上半分だけを物質化するのです。

通常、それだけで皆さんは私たちが誰であることを識別することができます。そしてそのようにすることで、私たちは「力(パワー)」を節約し、それを、私た

ちが終わった後に物質化を望んでいる他の霊たちのために残しておくことができるのです。

今夜は、ここには非常に豊富な「力(パワー)」があります。というのも、ここにいる七人の男性は皆とても健康であり、その力を使う予定なのは私たち二人だけだからです。

そのため私は、私の先輩である「ケイティ」が、かつてこの同じ感応者を通じて、Sir William Crookes に対して行っていたのと同じように、頭の先から足の先まで完全に物質化した姿を皆さんにお見せすることができるのです。

しかし、私の言葉を事実として受け取っていただきたいのですが、この国において全身物質化はまれです。その理由は今申し上げた通りです。

大多数の場合は、部分的な物質化にすぎないので
す。

**** 地上との絆をゆるめること ****

質問

私たちが「死」と呼ぶ変化によって肉体を離れる時、望ましくない地上的な状態をすべて後に残していくよう、あなた方は私たちに強く勧めています
が、その意味をもう少しはっきり説明していただけませんか。

回答

友よ、もしあなたが、私たちが第一界層の住人たちの間で救済の仕事を行う際に目にしている痛ましい光景を一度でも見る事ができたなら、私たちが繰り返し皆さんに対して、肉体を離れる前に地上への執着をゆるめておくよう勧めていることの重大な意味を理解するでしょう。

そうした執着が残っていると、それがあなたを再び地上へ引き戻し、それらから満足感を得ようとする原因になってしまうからです。

もしあなたが透視力（クレアボヤンス、すなわち霊的に見る能力）を発達させていたなら、このような質問を私たちにする必要はありませんでした。なぜなら、望みさえすればいつでも、自分自身の霊的視力によって、第一界層の不幸な存在たちが耐えている苦しみを目の当たりにすることができたからです。

そこには、第一界層に属する人々の霊たちがいます。

それは、社会的地位の最も高い者から、最も貧しく墮落した者に至るまで、あらゆる階層の男女の地縛された霊たちです。

彼らは昼も夜も、あなた方の都市や町や村に群がり、自らの動物的本能を満たそうとしています。

いや、単に求めているだけではなく、実際にそれを満たしているのです。

その動物的本能とは、彼らが地上から第一界層へ持ち込んだものです。

そして彼らは、その目的を果たすために、不幸な人々——すなわち、肉欲的な考え方に支配された地上の男女——を利用します。

彼らは、そのような人々を支配し、この特別な目的のための道具として使うことができるのです。

それほどまでに、

****「類は類を呼ぶ」****

という言葉は、あなた方の世界においても、私たちの世界においても真実なのです。

賭博への執着、華美な衣装への執着、残酷な流血を伴う娯楽への執着、そして金銭への執着は、無知な人々だけでなく、十分な教育を受けた人々までも含めて、多くの男女を、肉体を最後に離れた後になってもなお、地上へ強く縛りつけています。

大食、すなわち過度な食欲への執着、さらにそれよりも悪いものとして、不節制——すなわち酒類などの酩酊性飲料への強い渴望があります。

そして、さらにそれより低い状態として、動物的欲望、すなわち官能的快楽への渴望があります。

これらの欲望によって、あらゆる階層に属する無数の人々が、地縛された霊として地上に縛りつけられています。

そして彼らは、今日の地上に非常に多く存在する肉欲的な人々を通して、それらの欲望を満たそうとし、また実際に満たしているのです。

あなた方の宴会場や、レストランや食堂の周囲には、今なお地上の食べ物を求め続ける第一界層の霊たちが群がっています。

肉食を好む男女、美食家、そして大食漢だった者たちです。

彼らは、宴席で食事を楽しんでいる人々に取り憑き、その人々の過度な飲食を通して、自らの欲望を満たそうと努めています。

あなた方のホテルの酒場や、宿屋や居酒屋のカウンターの周囲にもまた、酒を求める第一界層の霊たちが群がっています。

彼らは、哀れな人間がワインやビールや酒類を飲む時、その人を通して自らの渴望を満たすだけではありません。

さらに、その人間に対して、もっと酒を買うように、あるいは時には盗んででも手に入れるようにと、しきりに駆り立てるのです。

そしてついには、その人が無力な酔っぱらいとなって地面に倒れ込むまでそうさせます。

その間、その人を支配し、取り憑いている第一界層の存在は、その酔いの状態を大いに楽しみます。

なぜなら、それによって自らのアルコールへの渴望が、一時的に満たされるからです。

そして、これは動物的欲望、すなわち官能的欲望についても同じことが言えます。

あなた方の公園や広場、売春宿、そしてあなた方が「悪徳の巣窟」と呼ぶような場所の周囲には、昼夜を問わず、第一界層から来た無数の霊たちが群がっています。

彼らは、自らの動物的欲望を満たそうとし、そして実際に満たしているのです。

それは、地上の男女——肉欲的な考えに支配された人々——の行動を通して行われます。

そのような人々は、彼らと同じような欲望を抱いており、それを実際の行為として実現することができるからです。

そして第一界層から来た支配的な存在、取り憑いている存在たちは、その人々をさらに大きな放縦へ、さらに大きな放縦へと駆り立て続けます。

その結果、ついにはその不幸な人間は、そのような患者を収容するために設けられた病院へ送られることになります。

あるいは刑務所へ、精神病院へ送られることになります。

さらには、その動物的欲望のために、自ら命を絶ち、地上での生涯を終えることさえあるのです。

では、私たちが知っているように、動物的情欲に今なお強く支配されたまま肉体を離れる者たちを待ち受けている恐ろしい状態を知っている以上、私たちがあなた方に「地上との絆をゆるめなさい」と繰り返し勧めることを、不思議に思うでしょうか。

その致命的な抱擁の中で、なお情欲に囚われたまま肉体を離れる者たちを待ち受ける恐ろしさを知っている以上、私たちがそう勧めることを不思議に思うでしょうか。

私たちは、あなた方に対して、今この地上にいるうちに自分自身をしっかりと制御し、克服するよう勧めているのです。

そうすることによって、あなた方が最後に肉体を離れ、「活動的な生命の界層」へ入る時には、地上のあらゆる望ましくない状態を永遠に後に残していけるようになるからです。

**** 偽りの現象 ****

****質問****(G.B.による)

私たちは、あなた方霊的存在が提示する現象の主張——すなわち、私たちの調査のために示される現象が本物であるという主張——について、科学的な訓練を受けた男女に調査をしてもらおうとすると、その最大の障害の一つに出会います。それは、彼らが感応者(Sensitive)やその共謀者たちによって巧妙にだまされるのではないかという恐れです。そして、そのような条件下での調査は単なる時間の無駄ではないかと考えるのです。このような反論に答えるために、何か助言をいただけますか。

****回答****

友よ、地上においては、実質的にあらゆるものの中に不正や詐欺が存在することを、あなたは知るでしょう。スポーツ、商業、専門職、政治、芸術、科学、

そして何よりも例外なく地上の数多くの宗教のすべての中にも、それは存在しています。しかし、その疑いようのない事実は、それらの中に本物が何一つ存在しないことを証明するものではありません。

そして理想的な調査者——開かれた心を持ち、それゆえに均衡の取れた精神を持つ幸福な人物——は、「それらすべてが詐欺に深く染まっていることが知られているのだから、自分が検討する価値はない」と軽々しく判断するのではなく、自ら慎重に、役に立たない粃殻の山の中から黄金の小麦粒を選び出すでしょう。

私たちが主張していること——すなわち、あなた方の実験的集会で目撃される現象は完全に本物であるという主張——を調査しようとする者は、このような精神で調査を始め、また継続しなければなり

ません。なぜなら、これらは彼にとって極めて重大な重要性を持つ問題だからです。

さて、物理的現象の発生に関連する不正行為全般の問題について述べるにあたり——もちろん、そこには皆さんが誤って「物質化現象 (materialisations)」と呼んでいるものも含まれます——まず最初に申し上げたいのは、私たちはそのような不正が起こり得る可能性を十分に認識しているということです。そして、この問題を次の二つに分けて考えます。

すなわち、

****第一に、感応者およびその共謀者たちによる意識的な詐欺。****

****第二に、感応者による無意識的な詐欺。これは実際には、無意識状態にある感応者を通じて働く支配霊による意識的な詐欺に相当します。****

前の章において、あなたは専門家として、感応者およびその共謀者たちによる意識的な詐欺を防ぐために取るべき予防措置について十分に論じています。そして私は、その予防措置に全面的に同意します。

感応者たちには、常に明るい場所で着座するよう訓練しなさい。ただし、その光は強いものでありながら、ある程度遮光されたものでなければなりません。そうすることで、光の中に含まれる化学線(アクチニック・レイ)が放出する振動の影響を抑え、それが私たちの実験作業を過度に妨げないようにするのであります。

また、感応者たちとシッター達には、調査者から求められたときにはいつでも快く応じて、自分たちの身体や衣服について綿密な検査を受けるよう訓練しなさい。そうすることによって、彼らが不正な現象を生み出すために使用され得るような物を、どこにも隠し持っていないことを調査者たちに証明できるのです。

このような条件のもと——あなた方があの優れた感応者フローレンス・クック(フローリー・クック、後のコーナー夫人)に対して、実験の際に何度も何度も課したような条件のもとでは——感応者やその共謀者による意識的な詐欺は、私の考えでは絶対に不可能です。

さて次に、感応者による無意識的な詐欺について考えなければなりません。これは実際には、無意識

状態にある感応者を支配している霊的存在による意識的な詐欺に相当します。

この主題の中には、私たちがすでに言及したように、十分な事前通知を行わないまま物質化現象の代わりに変容現象(トランスフィギュレーション)を行うことも含まれます。

このような置き換えは、通常は暗闇の中でしか行われ得ませんから、その対策は極めて簡単です。

支配霊(リーダー)が、あなた方の同意なしに変容現象を行わないと約束しない限り、暗闇での実験への参加を拒否しなさい。

さらに、その支配霊が、実験中のどの時点で求められても、その約束が守られていることを証明すると誓約しなさい。

私たちがこう述べるのは、実験者達のためだけでなく、感応者自身のためでもあります。

なぜなら、もし条件が破られ、しかも支配霊によって完全な無意識状態のまま椅子から連れ出された変容状態の感応者が、シッター達の中に現れているその瞬間に、誰かのシッターによって取り押さえられたならば、その結果は必ず同じだからです。

すなわち、照明が点けられると、不運な感応者本人が捕らえた人々の手の中で激しくもがいている姿が発見されることになります。そして彼らは直ちに、その感応者を詐欺師でありペテン師であると非難し、法廷へ訴えるのです。

あなた方の協会の役員達は、実験中に変容現象を行おうとする場合には、その意図を事前に出席者

全員へ十分に警告することなく実行した霊的存在
に対して、厳格な態度を取らなければなりません。

そして、もし同じことが二度目に起こったならば、そ
の問題を起こした霊的存在がリーダーとして活動
することを許されている実験会には、参加を拒否し
ても十分に正当化されるでしょう。

私は熟慮したうえでこのことを述べています。そし
てそれは、実験者達のためであるのと同じくらい、
無実の感応者を守るためでもあるのです。

また同様に、あなた方の協会の役員達は、外部に
ある物体を実験室内へ持ち込もうとする霊的存在
に対しても厳格に対処しなければなりません。その
霊的存在が、そうする意図を事前に出席者全員へ
知らせることなく行った場合には特にそうです。

なぜなら、何らかの理由によって、その霊的存在が実験終了前にその物体を部屋の外へ持ち出せなかった場合、その軽率な行動によって、無意識状態にあり完全に無実である感応者の評判が大きく損なわれるからです。

このことを、簡単な実例によってさらに詳しく説明しましょう。

感応者は深いトランス状態で椅子に座っています。そして、物質化した霊的存在が、シッター達に姿を見せるために仮の身体を構築した感応者の近くの場所から、まさに離れようとしています。

ところが、その仮の身体に入っている霊的存在が、自分の身元を証明するためには、生前いつも使用

していた——たとえば——独特な形をした杖を持って現れる必要があることが分かります。

そこで、その特別な形の杖を探すために、いったん中断が行われます。そして実験を補助している霊的存在の一人が、その杖を見つけるために周辺を熱心に搜索します。

そして、たまたま半マイル(約 800 メートル)ほど離れた家で、その杖を見つけたとしましょう。

すると、その霊的存在は素早くそれを空間の中を通して運びます——あなた方が壁や屋根や天井のような固体物質と呼んでいるものを通り抜けて——待っている霊的存在へと手渡します。

すると、その霊的存在は、その杖を持ったり、それにもたれたりしながら、生前まさにそうしていたのと

まったく同じやり方でシッター達の前へ歩み出てきます。

その霊的存在は、大きな喜びとともに直ちに認識されます。そして、その独特な形をした杖の存在によって、本人であることの証明はさらに確実なものとなります。

そして通常であれば、話はそこで終わります。

なぜなら、支配霊が私たちの界層へ戻るとすぐに、補助していた別の霊的存在が、その杖を実験中に一時的に使用するために持ち出した元の場所へ、正確に返しに行くからです。

しかし、ここで条件が破られたとしましょう。

物質化した霊的存在が、無意識状態の感応者のもとへ戻る前に、突然シッター達の一人によって捕まえられたと想像してください。

すると、その場の床の上には、確かに実体のある杖が残されているのです！

捕まえた者がどれほど力を尽くしても、その腕の中に物質化した姿を留めておくことはできません。

なぜなら、その姿は、どれほど強く抱き締められようとも、直ちに消え始め、速やかに感応者のもとへ戻ってしまうからです。

その姿が一時的にまとっていた衣服や覆いもまた、存在した痕跡をまったく残さずに消え去っていることが分かるでしょう。

しかし、床の上には、確かに実体のある杖が残っています。

そしてそれは、不運な感応者にとって、まことに決定的な不利な証拠となるのです。

なぜなら、その杖を部屋へ持ち込むよう命じた霊的存在は、どれほど努力しても、その杖を元の場所へ戻すことがまったくできないからです。

物質化した姿を捕まえようとしたことによって条件が乱されてしまったため、その霊的存在は、杖を持ち出した場所へ返却することができなくなっているのです。

そして、その杖が床の上に現れたこと自体は、「物質を物質の中へ通過させる」とあなた方が呼ぶ法則を理解している霊的存在が何を成し得るかを、

実験者達に示す驚くべき証拠であるにもかかわらず、その調査者はその法則について何一つ知りません。

おそらく彼は、それまでに物質が物質を貫通しているように見える現象を目撃したこともないでしょう。

そして、実験が始まる前に、その杖が空の部屋に隠されていたはずがないことは率直に認めながらも、即座に次のような結論へ飛びつきます。

すなわち、自分の目の前の床に横たわっている杖は、感応者によって何らかの方法で自分がだまされたことの確実な証拠であり、その感応者は単なる詐欺師でありペテン師に過ぎない、という結論です。

そして彼は、公の新聞その他の場でその感応者を「暴露」しようとしています。

しかし、そのような行為によって彼が暴露しているのは、実際には自分自身の粗野な無知なのです。

すなわち、あらゆる種類の物理的現象の発生を支配している法則についての無知です。

そして、そのような法則が実際に存在し、しかも不変であるという事実を理解できるだけの段階まで研究を進めてきた実験者達から見れば、彼は笑いものとなるのです。

私たちは、いかなる感応者をも詐欺師として断罪する前に、まず本当に誰に責任があるのかを慎重に調査するよう、あなた方に強くお願いしたいと思います。

そして多くの場合、あなた方は驚くことになるでしょう。

なぜなら、私のこの小さな例え話の場合と同じように、真の責任者は私たちの次元にいる存在であり、完全に無実である感応者は、自分ではまったく制御できない状況の犠牲者にされていたことが分かるからです。

その一方で、本当の責任者である支配霊は、まったく罰を受けることなく逃れてしまうのです。

最後に、私たちはあなた方に、常に次のことを忘れないでいただきたいのです。

私たちがあなた方のために示すことを許されている現象は、疑いなく極めて重要なものであります

が、それらはただ一つの目的のために、そしてその目的のためだけに用いられなければなりません。

それは、あなた方が地上にいる間に、自らをより高く、より純粹に発達させることです。

すなわち、あなた方自身の靈的成長のためです。

これらの現象は、アルファではありますが、オメガではありません。

それは調査者にとっての出発点に過ぎず、終着点ではないのです。

私たちが地上のあなた方のもとへ来るのは、単に私たちが別の界層に存在していることを証明したり、不思議なものを求める人々に驚異的な現象を見せたりするためだけではありません。

私たちの目的は、人類の啓発と進歩のための、真剣で実際的な仕事にあります。

私たちは、この世界がこれまでに持ったことのない、より真実で、より明るく、より優れた人生哲学を教えるために来ています。

また、あなた方自身の存在に関わる大きな問題の解決を助けるために来ています。

さらに、あなた方自身のため、そして他者のために、より高い目標とより気高い努力を抱くように励ますために来ています。

そして、私たちのより広い経験から得た利益をあなた方に与え、それによって地上で与えられた機会を

最大限に、そして最善の形で活用するように促すために来ています。

また、私たちにできる限り、あなた方の誤りを正し、現在の人生と未来の人生の双方における実際的な義務を果たせるよう教育するために来ているのです。

実際のところ、私たちがあなた方のために持っている善なる目的は、私たちの存在を証明することだけにとどまらず、数え切れないほど多岐にわたっています。

そして、現象的な顕現だけで満足してしまい、それらをより高いところへ導く踏み石として用いて、霊的真理の偉大な神殿へ向かおうとしない調査者達は、ただの無意味な見物人に過ぎません。

彼らは、しばらくの間は驚かされ、あるいは楽しませられるかもしれない「無言劇」を眺めているだけであり、それによって精神的な成長にも、霊的な成長にも、何一つ付け加えることができないのです。

理性的な人の心を、霊との交信が現実であると納得させるのに十分な証拠を受け取った後は、「しるしを見せてほしい」という騒ぎは終わるべきです。

しかし、多くの人々の場合に見られるように、嘆かわしいことですが、その要求が一か月また一か月、一年また一年と続くならば、それは精神の病的な状態を示しています。

そして、感覚的な現象を得ることを目的として、実験的な集会へ絶えず通い続けることは、精神的な放縦となります。

その結果は狂信へと至り、少なくとも時間と金銭と生命力の浪費となります。

そして場合によっては、それよりさらに悪い結果を招くことにもなるのです。

付録

1909 年から 1913 年までの 4 年間にわたり、フランスおよびドイツにおいて、非常に厳格な試験条件のもとで、一連の慎重な実験が行われました。

これらの実験は、ミュンヘンの医師であり、この分野におけるドイツ最高権威の一人と評されている Baron von Schrenck-Notzing 男爵を中心とする複数の科学者によって実施されました。

その目的は、彼が「テレプラズマ(teleplasma)」と名付けた可塑性物質の存在に関するさまざまな問題を解明することにあります。

彼らの研究結果は現在、男爵によって『Materialisations Phaenomene』という大著として出版されています。

この書物には多数の写真やスケッチが掲載されており、それらの写真には、完全な「テレプラズマ」が形成される過程における「アトモプラスティック (atmoplastic)」段階および「パキプラスティック (pachyplastic)」段階で見られる、蒸気状の物質と生地状の物質の両方が明瞭に写されています。

そこには、この物質が感応者 B の身体のさまざまな部分から放出されている様子が示されており、さらに、感応者たちの身体がしばしば包まれていたモスリン布の細かな網目を実際に通り抜けている様子も確認されています。

しかもその際、感応者たちの手は実験者によってしっかりと保持されており、ときには足も同様に押さえられていました。

さらにそれ以上に、彼らは二度にわたり、この「テレプラズマ」の一部を採取することに成功しました。

そして、その試料は化学分析および顕微鏡検査に付されました。

その結果は、本書の付録として掲載されています。

感応者は二人の若い女性でした。

一人は 23 歳のマルト・ベロー嬢(Mlle. Marthe Berand)、もう一人は 19 歳のスタニスラワ・P 嬢(Mlle. Stanislaw P.)でした。

彼女たちはいずれも、科学のためという目的のもと、自発的に、しかもいかなる報酬も受け取ること

なく、自らを極めて厳密な検査と最も厳格な試験に委ねました。

また、多くの実験では、常に赤色光の中で行われたとはいえ、完全に裸体の状態で着座し、さらにその場にいた医師たちが、いつでも身体のあらゆる部分を検査することを自由に許可していました。

二百枚に及ぶ写真(活動写真による記録を含む)は、閃光撮影によって撮影されました。

そしてある実験では、マルト嬢に対して、異なる角度に配置された九台もの写真機が同時に作動させられました。

以後、名前を何度も繰り返すことを避けるために、私が引用した報告書の三人の実験者を、それぞれ次のように呼ぶことにします。

A——指導者(リーダー)

B——実験者 B

C——著名な科学的懐疑論者である実験者 C。

「物質化現象」と呼ばれる現象を詳しく調査した人々は、霊的存在が部分的であれ完全なものであれ、一時的な身体を形成して出現する前に、その存在が感応者およびシッター達から材料を調達し、それを次の四つの異なる用途に用いなければならないという事実をよく知っています。

すなわち、

(1)骨、頭蓋骨、歯、爪などの固い部分を形成すること。

(2)肉、心臓、肺、腸などの柔らかい部分、および外側の皮膚を形成すること。その皮膚は、その支配霊が地上で生きていたとされる国籍に応じて、白色、黄色、褐色、または黒色に着色されます。

(3)身体の毛髪を形成すること。その色は黒髪、金髪、あるいは灰色などです。

(4)さまざまな材質や色彩を持つ衣服を形成すること。

そして、以下の要約報告を読むと、その記述が非常に大きく異なっていることに気づくでしょう。

しかし、それは当然予想されることでもあります。

なぜなら、「テレプラズマ」は、その形成過程におけるアトモプラスティック段階およびパキプラスティック段階において、A、B、C によって区別なく触れられていたからです。

A は、「パキプラズマ(pachyplasma)」に触れた際、次のように報告しています。

「私の指は、しっかりした暗色の(ほとんど黒く見える)物質に触れた。それはキノコの黒い表皮に触れるのに似ていた。」

また別の箇所では、

「しっかりしていて、冷たく、湿った物質であったが、触れると消えてしまった。」

さらに別の箇所では、

「湿っていて冷たい、帯状の網目状物質であった。」

さらに、

「それに触れた感じは、有機的で湿った物質という印象を与えた。」

とも述べています。

彼はまた、感応者から放出されている「アトモプラズマ(atmoplasma)」の中へ手を入れることを許されました。

そして彼は、

「まるで蜘蛛の巣を壊してしまったかのような感覚を覚えた。」

と述べています。

(おそらく(4)の衣服形成過程にある一部分であろう。——G.B.)

B は、感応者の首から出てくる一種のヴェールのようなものを観察しました。

それは彼女の腕の上に垂れ下がり、そのまま床まで伸びていました。

B の手は、感応者の左手によって導かれます。

(その左手は B がしっかり握っており、一方で A は感応者の右手を握っています。)

そして、そのヴェール状のものへ導かれた B は、それをつかみました。

(おそらく(4)の衣服が完全に形成されたものであろう。——G.B.)

その後、B は次のように報告しています。

「私は突然、冷たくて粘着性のある塊が私の手に触れるのを感じた。私はそれをしっかりと握り、感応者の右手を放さないまま慎重に自分のほうへ引き寄せた。その間、C は感応者の左手を握っていた。

その塊は私の指の中で伸びていき、私の手から垂れ下がった。そして私はそれを一、二分間観察することができた。

……私がその物質を慎重に引き離し続けると、それは私の手から消えてしまった。」

Bはその物質を次のように描写しています。

「平たく、筋状で、糸のようであり、粘着性があり、冷たく、生きているような物質であった。臭いはなかった。色は淡い灰白色であった。接触したため、私の指は湿ったままであった。」

Bは、その手に保持した塊を、その発生源である感応者の左肩のところまでたどりました。

そして、それを

「密度が高く、丈夫な物質からなる粗雑な結び目のようなもの」

と描写しています。

また別の箇所では、

「湿っていて、冷たく、粘着性があり、繊維質で、不規則な形に形成された長い皮膚片のような印象を与えた。それは明確な硬さと形状を持っていた。」

と述べています。

(「冷たく、じめじめしており、臭いはなかった」というのが私自身の印象であった。——G.B. 28 ページ)

B は、この粘着性のある塊の小片を摘み取り、それを引き裂いてみました。

すると、その手の中には毛髪だけが残りました。

しかも、その毛髪の色は感応者自身の毛髪の色とはまったく異なっていました。

(おそらく(3)の毛髪形成過程の一部であろう。
——G.B.)

B は、その物質が感応者の口から大量に出てくるのを目撃しました。

その一部は A の手の上に 6 秒間載せられ、その間に B によって写真撮影されました。

B はそれについて次のように述べています。

「それは部分的に透明に見え、ゴムのような弾力性を持っていた。

大きさに比べて重く感じられた。

膜状の(腸のような)組織に似た、重い有機物質であつた。」

(おそらく(2)の腸形成過程にある一部分であろう。——G.B.)

B は、感応者の膝の上に置かれていたその物質の一部に触れました。

すると、

「しっかりしていて硬く、丸みを帯びた物体であり、表面はざらざらしていた。それは骨のように感じられた。」

と報告しています。

(おそらく(1)の骨形成過程の一部であろう。――G.B.)

Cはその物質について次のように描写しています。

「冷たく、比較的重さがあり、小さな爬虫類が私の手の上に乗っているような感触であった。」

また別の箇所では、

「爬虫類のような、湿って冷たい皮膚であった。」

と述べています。

写真には、アトモプラズマ(atmoplasma)――すなわち「蒸気状の物質」――が、雲のように感応者

の頭部の周囲に形成されている様子がはっきりと写っています。

また、パキプラズマ(pachyplasma)——すなわち「生地状の物質」——が次のような形で出現している様子も明瞭に写されています。

(1) 細い帯状、あるいは幅広い帯状のもの(細長い帯片)。

(2) 大きな塊状のもの。

(3) 索状のもの。これは人間のへその緒によく似ており、太い紐のようなものから細い紐のようなもの、さらには糸のようなものまで含まれていました。

それは、感応者の頭頂部、頭の側面、そして後頭部から塊状となって放出されている様子が示されています。

そして時には、頭全体を完全に包み込んでしまうこともあります。

また、口からは帯状あるいは流れ状となって放出され、首からも現れています。

さらに、両肩からは大きな塊となって放出されています。

また、乳房から、へそから、そして膣からも放出されています。

一般には重力によって下方へ流れ落ちていくように見えますが、しばしば膣やへそから出現し、爬虫

類のような動きで上方へ進みながら口へ向かうこともあります。

あるいは、乳房から優雅に垂れ下がることもあります。

(その形態には知性を思わせる特徴が見られ、また、あたかも自らの意志によって動いているかのように見える。——G.B.)

感応者は、一方の足を A の膝の上に、もう一方の足を C の膝の上に乗せています。

そして A と C は、それぞれ感応者の片手を握っています。

その状態で、パキプラズマがへそおよび膣から塊状となって放出されている様子が示されています。

この物質が形成される身体部位は、おそらく主要な神経中枢であると思われます。

すなわち、太陽神経叢、松果体、脳、および脊髄です。

そしてその後、その神経中枢に最も近い身体の開口部から滲み出してくるのでしょう。

すなわち、口、耳、乳房、へそ、そして女性の感応者の場合には膣からです。

——G.B.

顕微鏡検査および化学分析に供することのできる物質の一部を採取しようと考えた A は、内側を磁器で裏打ちした小さな金属製の箱を用意しました。

その箱にはぴったりと閉まる蓋が付いていました。

そして彼は、それが突然必要になる場合に備えて、その箱を常に注意深くポケットの中に携帯していました。

A と B の両者は、「テレプラズマ」の一部を採取することに成功しました。

A の報告によれば、

(その時、感応者の両手ははっきりと見えていた。)

彼は、感応者の右手から約 12 インチ(約 30 センチ)上方に箱を開いた状態で保持していました。

すると、

「三本の指が形成され、それがまず箱に触れ、次に箱の中へ入り込み、数回振るような動作を行った。

私はすぐに蓋を閉め、その箱をポケットへ入れた。」

と述べています。

また別の機会には、

(その時、感応者の両手は A と B によってしっかり保持されていた。)

B が箱を持っていました。

すると、

「皮膚のような長い帯状の物質が、ぞっとするような動きで感応者の口から滑り出し、左前腕の上を
通って進み、その物質の小片を箱の中へ落とした。

すると残りの物質は、稲妻のような速さで感応者の
もとへ戻っていった。

これが何度も何度も繰り返され、五回目の試みで、
その物質は箱を満たした。

その際、重力によって螺旋状に落下しながら箱の
中へ積み重なっていった。」

A が採取した試料は、電灯の下で調べられたところ、二つの小さな物質片から成っていることが分かりました。

そのうち一つは長さ 0.63 インチ、幅 0.43 インチ、厚さ 0.09 インチでした。

もう一方の、より薄く細かい部分は直径 0.47 インチでした。

それらを検査した結果、人間の皮膚の一部であることが確認されました。

その顕微鏡写真も掲載されています。

(おそらく(2)の皮膚形成過程の一部であろう。——G.B.)

顕微鏡検査では、色素を含む上皮細胞が明瞭に確認されました。

感応者は直ちに検査されましたが、その皮膚のどの部分にも欠損は見つかりませんでした。

B が採取した試料は、電灯の下で検査された結果、透明で粘液状の液体約 4 分の 1 パイント(約 140 ミリリットル)から成ることが判明しました。

その液体には気泡は含まれていませんでした。

(もし箱が体温程度まで温められていたなら、この物質はそれほど急速に液化しなかったかもしれない。冷たい琺瑯質との接触は避けるべきであった。
——G.B.)

****分析結果****

無色で、わずかに濁った液体である。

糸を引くような性質はない。

臭いはない。

細胞の崩壊残渣および痰（唾液様物質）の痕跡が認められる。

沈殿物は白色を帯びている。

反応は弱アルカリ性である。

****顕微鏡検査****

多数の皮膚片が認められる。

痰に似た物体がいくつか認められる。

粘膜由来の顆粒が多数認められる。

極めて微細な肉組織の粒子が多数認められる。

「sulphozyansauem potash(スルホツィアン酸カリ)」の痕跡が認められる。

乾燥残留物の重量は 1 リットル当たり 860 グ레인であった。

灰分は 3 グ레인であった。

検査対象となったその物質は、感応者の口を通して出てきたものであるという事実には注意が向けられています。

したがって、その検査によって痰の痕跡や、感応者が最後に食べた食物のごく微細な破片が発見されるのは、むしろ当然のことであるとされています。

著者(A)は、この物質が、その形成過程における蒸気状の段階と生地状の段階(アトモプラスチック段階およびパキプラスチック段階)の両方において実在することが証明されたと認めています。

そしてテレプラズマについて、次のように説明しています。

「それは未知の方法によって生じる一種の一時的な物質であり、生物学的な機能と変形能力を備えている。

そして、その性質は実験対象者の精神的影響に、極めて特別な程度で依存している。」

****終わり****

